

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 神となりし光龍 ~

Blue

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers〜神となりし光龍〜

### 【Nコード】

N7665V

### 【作者名】

Blue

### 【あらすじ】

聖龍王として他の部族王と戦い、光龍王として魔王マスターリオンと戦い、光龍帝として先代皇帝の遺志を継ぎ、『神羅連和国』を収めたサイガ。それから凡そ800万年後、羅震鬼が世界の侵略を始めると同時に、平行世界ミッドチルダにも危機が迫っていた。次元神の遣いとして神に転生したサイガ。彼はミッドチルダの地で、新たな戦いの日々を身を投じていく。

誰でも感想が書けるようにしてあるので、気軽にお書きください

第0話 序章 神への転生(前書き)

駄作者、駄文なので、あまり期待はしないで下さい。

では、どうぞ

第0話 序章 神への転生

【サイガside】

サイガ

「ここは、何処だ？」

眼が覚めると、辺り一面には、ただただ皓白とした景色が広がっていた。

つまりは何も無いと言う事だ。

こつも何も無くては、ここがどう言う場所なのか見当もつかない。

何より突然の出来事だった。

“気がついたらここにいた”

ただそれだけだ。

しかし、別段驚くべき事でもない。

何故なら

俺は、死んだのだから。

亡き先代皇帝『黄龍帝フガク』の遺志を継いで『光龍帝』となり、  
漸く1つとなった『神羅連和国』を束ねて幾星霜

遂に俺も天に召されたのだろう。

だから思った。

サイガ

「ここは 天国なのか？」

???

「天国ではありませんよ 光龍帝サイガ」

サイガ

「!!!」

突如、背後から聞こえた声に振り返ると、そこには1人の女が立っていた。

清く透き通ったローブを纏い、悠然と佇みながらも、どこか神々しいオーラを醸し出す。

そんな美しい女性だった。

サイガ

「誰だ？」

その雰囲気に一瞬吞まれてしまったが、すぐに我に返り、眼の前の女性にその正体を訊ねる。

????

「私は『次元神ディメンシス』」

サイガ

「次元神？ ディメンシス？」

どちらも聞いた事が無かった。

いや、“次元神”と言えば、確か

サイガ

「あの“次元神”か!？」

俺は記憶の隅々を辿り、その単語を見つけ出した。

昔、書物か何かで読んだ事がある。

自分達の世界とは別に、『パラレルワールド平行世界』』と言つものが無数に存在し、世界同士が互いに干渉が出来ぬよう“次元神”が管理し、調和を保っている。

サイガ

「お前がああ“次元神”だと言つのか？」

デイメンシス

「はい。その“次元神”です」

女性、もといデイメンシスは笑顔で頷いている。

その様子からして、どうやら嘘ではないらしい。

サイガ

「それで、その次元神が俺に何の用だ？」

デイメンシス

「『調和神バランシール』様の命を伝えに、アナタにお願いがあつて来たのです」

サイガ

「願い？ “調和神バランシール”とは誰だ？」

今度の名前は聞いた事が無かった。

少なくとも、俺の記憶の中にその名前は存在しなかった。

デイメンシス

「アナタの死後、凡そ1000年の時を経て誕生した新たな神にして我ら神々の長」

サイガ

「そうか ん？」

俺はデイメンシスの説明の中、ある言葉が引つかかった。

サイガ

「死後 1000年だと!？」

おかしい。

確かに死んだと言う感覚はあるが、そんなに時が経った感覚は無い。

サイガ

「俺は 1000年前に死んだと言うのか!？」

デイメンシス

「いいえ。アナタが亡くなってから、既に800万年の時が過ぎています」

サイガ

「800 万年!?!？」

驚愕的な数字だった。

まさか8000倍だったとは。

デイメンシス

「ええ、アナタは覚えている筈。アナタが子孫と共に、永きに亘る因縁に決着をつけた事を」

サイガ

「決着　　っ！！！」

デイメンシスに言われ、俺は再び記憶を辿る。

そして、思い出した。

時空を超えて、自分の子孫である『リュウガ』と共に、復活した『魔神マスターオン』を倒した事を。

サイガ

「あの戦いが確か、1000年後だった筈。だとすると俺は、700万年以上も何をしていたんだ？」

デイメンシス

「アナタは　　正確にはアナタの魂は、ずっと眠り続けていたんです」

サイガ

「眠っていた　だど？」

デイメンシス

「アナタの魂はあの戦い以降、永い眠りについてしまったのです」

デイメンシスが言うにはこう言う事だ　。

俺が“光龍帝”として天命を全うした時から1000年後

子孫達と共に、復活した“魔神マスターオン”と戦い、チカラを使い果たした俺は、再び永い眠りについてしまった。

その後、リュウガは“光龍神”として転生し、神々の長である“調和神バランスール”に仕えているらしい。

とても衝撃的な事実だった。

サイガ

「あのリュウガが神に転生とは　。フッ、何と言うか　誇らし  
いな　」

衝撃的ではあったが、その分、子孫の業が誇らしくもあった。

サイガ

「俺の事はわかった。大分話が逸れてしまったが、調和神の願いとは何だ？」

俺は話を元に戻した。

デイメンシス

「はい。リュウガさんが神に転生し、バランシール様に仕えているように、アナタも神に転生し、助けて欲しいのです」

サイガ

「俺が神に？ だが、既に調和神やリュウガが世界を護っているのなら、俺は不要ではないのか？」

話を聞く限りでは世界は既に平和を取り戻している。

新たな神など必要ないのではないか？

俺はそんな事を思った。

ディメンシス

「元の世界ではありません。アナタには神として 正確には、次元神である私の使いである神として転生し、別の世界を救って欲しいのです」

サイガ

「別の世界？」

ディメンシス

「今、元の世界と平行世界パラレルワールドの1つである『ミッドチルダ』。2つの世界に、同時に危機が訪れているのです」

サイガ

「同時にだと!？」

それからディメンシスは語り始める。

元の世界と“ミッドチルダ”。

2つの世界にそれぞれ迫っている危機を。

元の世界で“羅震鬼”と呼ばれる悪鬼達が復活し、世界を侵略しよ

うとしていると。

そして、元の世界で守護神として転生したマスターイオンから浄化された筈の“魔神の魂”が、どう言う訳かミッドチルダで復活しようとしていると。

それと同時に、元の世界で滅びた筈の皇魔族も、同じくミッドチルダで復活しようとしていると。

サイガ

「そんな 事が ！？」

俺はさらに驚愕した。

そんな事態が起ころうとは。

デイメンシス

「バランシール様やリュウガさんは“羅震鬼”の事もあって別世界まで手が回らず、事態の解決のため、私に白羽の矢が立ったのです。元々平行世界パラレルワールドの件は私の管轄なので。けど、私1人の力では魔神の持つ邪悪な力には到底敵いません。ですから つ！！」

俺はデイメンシスの言葉を遮り、その口に自分の手を翳す。

もう、それ以上は聞く必要が無かったからだ。

サイガ

「もういい。それだけ聞けば、十分だ！」

俺の決意は決まった。

サイガ

「次元神デイメンシスよ、俺はお前に仕えよう。俺を導いてくれ！」

デイメンシス

「は、はい!!」

俺の言葉にデイメンシスは歓喜し、とても嬉しそうに返事をする。

今、元の世界では俺の子孫達が世界を護るために戦っている。

ならば俺も戦おう。

必ず、世界を救ってみせよう。

こうして、俺の新たな戦いの日々が始まる事となった。

そして、俺は“次元神ディメンシス”の遣いとして、ミッドチルダの地に降り立った。

T o b e c o n t i n u e d

第0話 ～序章～ 神への転生（後書き）

勢いで始めてしまった

（ - ” - ; ）

正直『神羅万象』自体、第2、3章以降買ってないけど。

まあ、何とか頑張りましょう（笑）

『破滅大戦』と平行してやっていきますので、よろしくお願いします！

設定話 〱公開〱 聖龍王サイガ（前書き）

主人公・サイガの設定です。

色々ところ都合主義とか 若干ネタバレとかもあるかと思いますが

では、ごじゆぞ

設定話 ～公開～ 聖龍王サイガ

名前

【サイガ】

二つ名

【聖龍王】

【光龍王】

【光龍帝】

身長

【175cm】

体重

【60kg】

普段着

【聖龍の衣】

サイガが普段着ている着物。特殊な魔力の繊維で出来ているため、魔力による修復が可能。

第1章第1弾参照

戦闘形態

【通常形態】

一番目の戦闘形態で、力は解放時の約5〜6割程度。  
第1章第2弾参照

#### 【解放形態】

二番目の戦闘形態で、剣の殺傷性能と機動力が大幅に上がる。  
第1章第3弾参照

#### 【覚醒形態】

三番目の戦闘形態で、光龍王の力を発動させた形態。すべての力が大幅に上昇するが、その分負担も大きく、長時間の維持は難しい。  
第1章第4弾参照

能力

#### 【飛行能力】

空を飛ぶ能力

#### 【解放】

力を解放して『解放形態』の鎧を纏う。

#### 【光龍王】

自身の中に眠る光龍のチカラを覚醒させ、黄金の鎧と光牙七支刀を装備する。

技

#### 【七天伐刀】

雷を纏った七支刀で斬りつける、もしくは雷の斬撃を放つ。

#### 【我龍天聖】

最大で7体の雷の龍を召喚する。

#### 【電光刹華】

刹那の斬撃で相手を攻撃する。

#### 【双龍伐刀剣】

『光龍王』の状態で使用可能。2本の光牙七支刀で『七天伐刀』を放つ。

#### 【央霸封神】

#### 【封印魔破】

#### 概要

神話の時代、魔王マスターリオンと戦い、世界に平和を齎した伝説の部族王。マスターリオンとの決戦後、前皇帝『黄龍帝フガク』の遺志を継ぎ、“光龍帝”として世界を治めていた。それから凡そ800万年後、“次元神ディメンシス”の遣いの神として転生し、ミッドチルダの地に降り立つ。真面目で思慮深く、それでいて苛烈で正義感が強い性格。聡明で才知に長け、異世界の文化（ミッド語やミッド文字、その他様々な近代文化）にも比較的早く馴染む事が出来る。剣術と魔法を得意とし、戦闘スタイルとしては自身の剣『七支刀』と魔法を組合わせて戦う『魔法剣士』に該当するが、体術、特に柔術も得意とし、素手でも十分に戦える実力を持つ。魔法は主に“雷系”のモノを使用する。

設定話 〽公開〽 聖龍王サイガ（後書き）

技は自分の想像です。

何か意見があればよろしくお願いします。

m ( ( ( m

では、本編で

第1話 〱 降臨 〱 聖龍王サイカ（前書き）

第1話です。

今回でミッドトに行きます。

そこでアイツらと逢います。

では、ごうござん

## 第1話 〱 降臨 〱 聖龍王サイガ

【3人称side】

新暦75年5月中旬

ミッドチルダの一角に位置する森林の中に神が降臨した。

サイガ

「ここがミッドチルダなのか？」

次元神デイメンシスの力によって次元神の遣いの神へと転生したサイガは、ミッドの地に降り立った。

しかし、いきなり降り立った場所が暗い森の中だったと言っるのが悪運だった。

これでは東西南北がわからない。

サイガ

「さて、どうしたものか」

サイガが考え込んでいると、突然事態が急変した。

突如、サイガの周りを奇妙な筒状の機械達に取り囲んだ。

サイガ

「何だ、貴様ら」

サイガは機械達を睨むが、そこはやはり機械。

それに反応する事もなく、ジッとサイガを見ている。

サイガ

「（人 ではないな。いや、鋼の武装か？）」

サイガは機械達の正体について考察していた時、1機の機械がレーザーを放ち、攻撃を仕掛けてきた。

サイガ

「」

しかし、サイガは別段慌てる素振りを見せない。

そして、自身の剣『七支刀』を構え、フツと笑みを零すと、

シューイイイン

一瞬で機械の前まで移動し、その機体を斬り裂いた。

サイガ

「なるほど、機械仕掛けの兵隊か。 。 鎧羅の機士達を思い出すな

」

サイガは自分の足元に転がる機械の残骸を見て呟く。

生前 言うなれば“人間”として生きていた頃、共に戦った“鎧羅族”が得意としていた機械仕掛けの武器を使った戦法。

サイガはそれを思い出していた。

そうしている間にも機械達はサイガに攻撃を仕掛けようとしていた。

サイガ

「そう言えば俺は700万年以上も眠っていたんだっただな。鈍った体を動かすには丁度良い運動だ」

サイガは準備運動と言わんばかりに体を動かす。

サイガ

「さて 勝負と行こうか！」

サイガは再び七支刀を構える。

その瞬間、数機の機械がレーザーを放つ。

サイガ

「はああっ!!」

サイガは剣を横薙ぎに振るい、レーザーを弾き返すと同時に数機の機械を斬り裂いた。

サイガ

「どつやら同じ機械仕掛けの兵器でも、鎧羅のソレには遙かに劣るようだな！」

眼の前の機械達が思ったよりも高性能ではないと判断したサイガは、迷う事なく次々とそれを破壊していく。

機械達が出現した森林から数百メートル離れた場所の上空。

そこに2つの人影が浮いていた。

いや、飛んでいた。

空を飛んで移動していた。

1人は白いドレスのような服に身を包み、栗色の髪をツインテールにした女性、高町なのは。

もう1人は軍服調の黒い服に白いマントを身に着け、金髪をツイン

テールにした女性、フェイト・T・ハラオウン。

2人はレリックの反応と小さな次元震があったと言う森（現在サイガが機械達と戦っている森）に調査に向かっている。

なのは

「反応はこの辺りだよな？」

なのはは反応があった森林上空で静止し、隣にいるフェイトに訊ねる。

フェイト

「うん。多分この辺りだった筈だけど」

なのはもフェイトも眼の前に広がる異様な光景に頭を捻る。

その光景とは、自分達の足元に大量の機械の残骸が散らばっている光景である。

フェイト

「これって、ガジェットだよな」

なのは  
「うん。でも誰が」

ガジェットと呼ばれる機械の残骸を眺める2人。

2人が今考えている事はただ1つ。

“誰がこれをやったのか”

それが気になっていた。

一般人ならば保護しなければならぬし。

まあ、こんな事が出来る一般人もそうそういないだろうけど。

その時、

ゴオオオッ!!

なのは・フェイト

「「!!」」

ここより近い場所の森の中で、轟音が響いた。

その音に反応した2人は、すぐさまその音の発生源へと向かう。

音のした場所に着くと、そこにも又ガジェットの残骸が転がっていた。

しかし、

フェイト

「まだ温かい。破壊されてからそんなに時間が経ってない」

フェイトの言葉からして、犯人（別に悪い事をしている訳ではないが）はまだ近くにいると推測された。

その推測通り、

ザザッ

なのは・フェイト

「「っ！！」」

背後から物音がして、2人が振り返るが、

ドオオオン！！

なのは・フェイト

「「っ！！？」」

振り返った瞬間、1機のガジェットが吹き飛んで来て、2人の後ろの木に激突して大破する。

2人は突然の出来事で、状況が今一理解出来ていなかった。

そして、

サイガ

「今ので最後か」

眼の前の茂みから風変わりな紫色の着物に身を包み、刀身から7つの刃が生えた奇妙な剣を携えた男が現れた。

その格好も奇妙なら容姿も又奇妙だった。

後ろで括られたかなり長めの青い長髪、側頭部から生えた大きな2本の角、鋭く尖った耳　所謂エルフ耳。

どこからどう見たとしても一般人だとは思わないだろう。

その男も2人に気づいた。

サイガ

「？　お前達もさっきの奴らの仲間か？」

男、サイガは2人を警戒したのか、身を構えて剣を翳す。

なのは

「待って下さい、私達は敵じゃありません。私達は機動六課の魔導師です。アナタが倒した機械は私達にとっても敵なんです」

なのはとフェイトも又、サイガを警戒していたが、その言葉からガジェットを破壊した人物だとわかり、警戒を解く。

と同時に、サイガに警戒を解いてもらおうと自分達の事を話す。

サイガ

「っ！ そうか それはすまなかった」

なのはの言葉でサイガも警戒を解き、剣を普通の刀の形状に戻して鞘に収める。

フェイト

「突然で申し訳ないんですが、アナタは何故ここに？」

緊迫した雰囲気から脱した事を機に、フェイトがこんな所にいた理由をサイガに訊ねる。

サイガ

「それは」

瞬間、サイガは考えた。

自分はこの世界を迫り来る危機から護るために神に転生してやって来た。

確かにそうだが、果たしてそれを言って良いものか

迂闊に事実を話して混乱させる訳にもいかない。

そもそも、眼の前の2人の女性達はその危機に関係していないとは言えない。

ここはまだ伏せておくべきだ。

僅か0.何秒の脳内考察を済ませ、口を開く。

サイガ

「気がついたらここにいて、気がついたらさっきの奴らが襲って来たんだ」

サイガにとってそれは嘘ではあるが、強ち間違いでもない。

それを聞いた2人は何かを考え、話を始めた。

なのは

「フェイトちゃん、この人」

フェイト

「うん、多分」

2人の会話を聞くサイガは表情こそ崩さなっていたが、内心ではホンの少しの焦りが生じていた。

今の自分の言葉で、何か2人に不信感を与えてしまったのではないか

一瞬そう思ったが、フェイトの口から出た言葉はサイガが危惧していたものではなかった。

フェイト

「アナタは、次元漂流者です」

サイガ

「次元漂流者？」

サイガは聞き覚えの無い単語に首を傾げる。

フェイト

「詳しくお話を訊かせて欲しいので、ご同行願えますか？」

フェイトはサイガに同行を願う。

サイガは少し迷ったが、あの機械が平和を脅かすものであるとするならば、その敵だと言う彼女達は自警団か何か　兎も角この世界を護る組織の人間であるだろうと考えた。

故に、

サイガ

「わかった。お前達の指示に従おう」

同行の願いを聞き入れた。

フェイト

「ご協力、感謝します。では」

なのはとフェイトはサイガを連れて六課へと戻ろうとした。

その時、

サイガ

「すまないが」

なのは・フェイト

「「?」?」

サイガが2人を呼び止める。

2人は何かと思い、サイガの方へ振り向く。

サイガ

「出来ればお前達2人の名を覚えてくれないか？ 名も知らぬ者に付いて行くのはあまり気が進まないのではな」

なのは・フェイト

「「あ」」

サイガが名前を訊いた事で、2人は何かを思い出したように素頓狂な声を上げ、少々たじろぐ。

なのは

「んんっ！ 申し遅れました、機動六課所属、高町なのは一等空尉です！」

フェイト

「同じく、フェイト・T・ハラOWN執務官です」

サイガ

「そうか。俺の名はサイガだ」

自分の問いかけに応じたなのはとフェイトに対し、自分も自己紹介をする。

サイガ

「よろしく頼むぞ、なのは、フェイト」

なのは

「はい！」

フェイト

「「うちら」」

互いの自己紹介を終え、3人は機動六課へと向かって行った。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

第1話 へ 降臨へ 聖龍王サイガ（後書き）

サイガの性格とか口調は私の想像なので、皆さんのイメージとは若干違うかも知れませんが、まあそこは温かい目で見てやって下さい。

m | | m

感想、指摘、要望、質問をお待ちしております。

ではまた

次回 へ 邂逅へ 機動六課

第2話 へ邂逅へ 機動六課(前書き)

ちよっちグダグダかな

取りあえず、どうぞ

## 第2話 邂逅 機動六課

【3人称side】

サイガはなのはとフェイトに連れられ、機動六課の隊舎へとやって来た。

ミッドチルダの一角にズッシリと構えられたその佇まい。

その入口に立ったサイガの第一印象は、

サイガ

「中々大きいな」

大して驚きはしなかった。

まあ、そんなところだろう。

サイガの住んでいた世界 聖龍族の国や中央王国、さらに言えば他の部族の国にも六課程程度の建物はかなり点在していた。

だから別段“驚愕”などの感情は持ち合わせていなかった。

あっても“感心”　　と言つか“関心”くらいだろう。

そうこうしている内に、3人は六課の中に入って行く。

そして、ある1つの部屋の前で立ち止まり、なのはがその扉をノックする。

?????

「どござ〜」

ノックに反応し、中から若い女性の声が返ってくる。

なのは

「失礼します」

入室の許可を得て、3人は部屋の中へと入る。

部屋の中では、ショートカットの茶髪に髪留めをしている女性、八神はやてが椅子に腰掛けていた。

そして、その前になのはとフェイトの2人が立つ。

なのは

「高町なのは一等空尉」

フェイト

「フェイト・T・ハラOWN執務官」

なのは・フェイト

「「ただいま帰還しました」」

はやて

「うん、おかえり」

敬礼して帰還の報告をする2人を、はやては笑顔で迎える。

そして、2人の後ろにいるサイガに視線を移す。

はやて

「その人が報告にあった？」

なのは

「うん。えっと、サイガさん、自己紹介してもらってもいいかな？」

サイガ

「ああ」

なのはに言われたサイガは、はやての前まで出る。

サイガ

「俺の名はサイガだ。よろしく頼む　えっと　」

はやて

「機動六課の部隊長、八神はやてです。よろしく、サイガさん」

眼の前の女性の名がわからず困惑するサイガに、はやては自分の名を名乗り、2人は握手をする。

はやて

「（何やる　サイガさん、私らと同じくらいやのに　何か“王”って言うか　そんな風格があるなあ〜）」

はやてがそんな事を考えながらぼんやりとサイガを見つめている。

“見つめている”と言うか“見蕩れている”

その時、サイガが徐に口を開いた。

サイガ

「早速で悪いんだがはやて、“次元漂流者”とは何か、教えてもらえないか？」

サイガはフェイトから聞いた聞き覚えの無い言葉について、はやてに訊ねる。

はやて

「ん？ あ、ああ、そうやな」

サイガの質問にははやては我を取り戻し、その質問に答える。

はやて

「たまにやけど、何かが原因で元いた世界から別の世界に移動してしまう人がおるんや。それを“次元漂流者”って言って　うーん、まあ簡単に言えば迷子、かな？」

サイガ

「なるほど 迷子か」

正直自分には当て嵌らないのだが、先刻の脳内考察の通り、サイガは事実を伏せておく事にする。

しかし、それはそうとしても他の問題が出て来る。

事實は違うが、サイガは現在“次元漂流者”。

はやての言う通り、言わば迷子。

それによって生じる問題とは“衣食住”の件だ。

衣は問題無い。

サイガの着物は特殊な魔力の繊維で出来ているため、汚れようと傷つこうと魔力での修復が可能だからだ。

だが食・住はそうはいかない。

この世界の人間に賄ってもらおう事も出来るが、そんな迷惑を掛ける

訳にもいかない。

サイガが静かに苦悩していると、そんな様子を見ていたはやてがある提案を持ち出した。

はやて

「なあ、サイガさん。私らに協力してくれへんかな？」

サイガ

「ん？ 協力？」

はやて

「うん。実はサイガさんが森で戦ってたところを見せてもらたんや。あの機械はガジェット言うてな、普通の魔導師でも結構苦戦したりすんねん。それをサイガさんはあっさり倒してもうた。しかもその映像を解析したら、サイガさんの魔導師ランクは“AA”やったんや」

フエイト

「え？」

なのは

「はやてちゃん、それ本当？」

なのはとフェイトははやての言葉に驚いているようだ。

サイガはそれに付いて行けず、驚きの声上がる直前の言葉を話題に上げる。

サイガ

「魔導師ランクとは何だ？」

はやて

「魔導師ランクはそのまんま、私ら魔導師の力をランク付けしたも  
んや。あ、ちなみにさっき言った“AA”って実は結構高い方なん  
やで」

はやての説明に、サイガは「なるほど」と静かに頷く。

サイガ

「それで、“力があるなら自分達の仕事を手伝ってくれ”と言う事  
か」

はやて

「そうや。サイガさんは次元漂流者やからお金とか住む所とか無い  
やろ？ それを提供する代わりに、民間協力者として六課に所属し  
て欲しいんや。勿論、元の世界に帰れるようになるまで」 あ

「

そこまで言って、はやては自分の言葉に反応した。

はやて

「急に話変わるけど、サイガさんは何て世界から来たん？」

サイガ

「ん？ 俺は 神羅連和国と言つ世界にいたが」

サイガの答えを聞いたはやては、徐に空間パネルを展開し、何かを調べ始めた。

はやて

「うーん、アカン、“神羅連和国” と言つ世界も国も都市も見つからへん」

フエイト

「と言つ事は」

なのは

「サイガさんはパラレルワールド平行世界の人間って事になるね」

はやて

「そうなるな」

はやての言葉に、なのはとフェイトはサイガを平行世界の人間だと認識する。パラレルワールド

そして、はやては話を元に戻す。

はやて

「ほんなら益々六課におつてもらわなアカンな。パラレルワールド。幾ら次元世界を統括する管理局でも平行世界には干渉できんからな」

そう言いながら、はやては腕を組んで考え、再びサイガの方へ向き直る。

はやて

「改めてどうやる　協力してもらえへんかな？」

サイガ

「」

はやての問いに、サイガは黙って考える。

今までの流れからして、彼女達や彼女達が所属する組織が危険なものだとは考えにくい。

組織すべてがそうだとは言い切れないが、少なくとも眼の前の3人は信用できるだろう。

それに、どのみち他に行く当てがある訳でもない。

数秒間の思考の末、サイガは決断を下した。

サイガ

「わかった、お前達に協力しよう。改めて、よろしく頼む」

はやての提案を受け入れる事にした。

はやて

「よっしゃ！ 決まりやな！」

なのは

「「こちら」そよろしくね、サイガさん！」

フェイト

「よろしくね、サイガ」

3人は順々にサイガと握手を交わす。

その時、

???

「失礼します」

部隊長室の扉が開き、体長20cm程の少女が入ってきた。

サイガはその少女を見て一言。

サイガ

「ほお、この世界にも妖精がいるのか」

サイガの呟きに、妖精さん(?)が反応する。

???

「私は妖精じゃありません！ はやてちゃんのユニゾンデバイスの  
ラインフォースツヴァイ?です！」

サイガ

「す、すまない」

何やら怒っているような感じなので、サイガは取りあえず謝っておく事にした。

リイン

「もおゝ。ん？ アナタ誰ですか？」

リインはサイガの間近にいたにも関わらず、それが知らない人だと気づかなかったようで、改めて首を傾げる。

はやて

「その人は民間協力者のサイガさん。六課の新しい仲間や」

はやてはリインにサイガを紹介する。

リイン

「そうだったんですか。んんっ！ 改めて 初めまして、サイガさん。リインフォースリインフォース？です」

サイガ

「ああ。さっきも聞いたが、随分と長い名前だな」

リイン

「じゃあ“リイン”って呼んで下さい。みんなそう呼んでますから」

サイガ

「そうか。じゃあそう呼ばせてもらおう。よろしく頼む、リイン」

サイガは優しくリインに微笑み掛ける。

サイガとしては、さっき怒らせてしまった事への若干の償いのつもりだったのだが、

リイン

「こ、こちらこそよろしくお願ひします / / /」

何故か顔を赤らめ、横へ逸らせてしまった。

サイガはそんなリインの挙動に疑問符を浮かべ、それを見ていたはやては笑みを浮かべ、

はやて

「何やサイガさん、もうナンパしとるんか？」

サイガをからかう。

サイガ

「はやて、何を言っているかわからないぞ」

サイガははやてを軽く睨む。

なのは・フェイト

「あ、あはははは」

そのやり取りになのはとフェイトは苦笑するしかなかった。

はやて

「フフッ、まあええわ。ライン、シグナムとヴィータ呼んで来てくれるか？」

ライン

「あ、は、はい！」

はやての頼みを聞いたリインは、物凄い勢いで部屋を飛び出していた。

はやて

「さて、サイガさん」

サイガ

「ん？　なんだ？」

はやて

「今からサイガさんの正確なデータを取りたいから、模擬戦してもらおう思うんやけど　ええかな？」

サイガ

「ああ、構わない」

はやて

「ありがとう。けどまあ、ちょっと大変かも知れへんけど」

サイガ

「??？」

サイガはその眩ぎの意味がわからなかったが、後々理解する事となる。

あのバトルマニアの執着心を。

T o b e c o n t i n u e d

第2話 へ邂逅へ 機動六課（後書き）

六課に協力する事となったサイガ。

しかし、あのバトルマニアがサイガに眼を付けてしまうのだった！

サイガはこのピンチ（？）をどう切り抜けるのか！？

感想、指摘、要望、質問お待ちしております。

次回 へ剣戟へ サイガ vs シグナム

第3話 く剣戟く サイガ vs シゲナム(前書き)

進みがいいので連続です。

では、ごんぞ

### 第3話 〽剣戟〽 サイガ vs シグナム

【3人称side】

リイン

「シグナムさ〜ん、ヴィータちゃん、いますかあ〜？」

リインはある部屋の扉を開き、その2人の所在を訊ねる。

そして、その呼びかけに応じ、2人の女性（？）が扉の近くに寄ってきた。

ヴィータ

「なあ、上の（？）って何だよ」

赤毛の三つ編みの女性？      もとい少女、ヴィータが何かに疑問を持っている。

シグナム

「気にするな」

ピンク色の髪をポニーテールにした女性、シグナムがそれを軽く宥

める。

ヴィータ

「いや、でもさっきも“もとい少女”って 「それで、用件は何だ？」 もういいです」

シグナムに言葉を遮られ、諦めるヴィータ。

そんなこんなで話が進められる。

リン

「はやてちゃんが呼んでます。多分サイガさんの模擬戦をやるんだと思いますけど」

シグナム

「サイガ？ 誰だそれは？」

シグナムは聞き覚えのない名前をリンに訊ねる。

リン

「民間協力者さんらしいです。ガジェットを簡単に倒す実力を持っているとか」

シグナム

「フッフ、そうか、そうかそうか」

リイン

「あの〜、シグナムさん？」

ヴィータ

「ま〜た始まったか」

不気味に笑うシグナムと呆れ顔のヴィータを連れ、リインは訓練場へと向かう。

訓練場 観覧スペース

訓練場の観覧場所には現在7人の人物がいる。

なのは達隊長陣3人と、新人魔導師チーム“フォワード”の4人だ。

???

「なのはさん、これから何が始まるんですか？」

青い短髪の少女、スバルがなのはに訊ねる。

なのは

「新しい仲間とシグナムさんの模擬戦だよ」

???

「シグナムさんが戦うんですか？」

次に赤い髪の少年、エリオが訊ねる。

はやて

「ホンマはまだ決まってるないんやけど、シグナムやったら」

???

「やるって言いそうですね」

「??？」

「確かに」

オレンジの髪をツインテールにした少女、ティアナと、ピンク色の髪の少女、キャロが呟く。

フェイト

「あ、来たみたいだよ」

その言葉にフィールドを見下ろしてみると、サイガとシグナムが対峙していた。

そして、観覧スペースにもヴィータとリインがやって来た。

はやて

「ありがとな、リイン」

リイン

「いえいえ」

ヴィータ

「で？ 早速やってんのか？」

なのは

「今からみたいだよ」

観覧スペースで9人が見守る中、模擬戦が開始されようとしていた。

## 訓練場 フィールド

シグナムが訓練場に到着すると、そこにはすでにサイガが立っていた。

シグナム

「すまない、待たせてしまったようだな」

サイガ

「気にするな。それより、名を名乗った方がいいな。俺はサイガ、今日からここで世話になる事になった。よろしく頼む」

シグナム

「シグナムだ。こちらこそよろしく頼むぞ、サイガ」

2人は互いに自己紹介を終え、模擬戦の準備を始める。

サイガは今着ている着物を戦闘時の着物へと変化させ、シグナムはデバイス『レヴァンティン』を起動し、バリアジャケットを纏う。

そして2人の準備が完了した事を確認し、はやてが告げる。

はやて

「ほな行くで。模擬戦、開始！！」

模擬戦の開始を。

シグナム

「烈火の将、剣の騎士シグナム、参る！！」

シグナムは剣を構え、サイガに斬り掛かる。

サイガ

「!!!」

サイガは鞘から刀を抜き、シグナムの斬撃を受け止める。

シグナム

「ほう、ただの刀で私の剣を受け止めるとは 大した奴だ」

シグナムはサイガの技に感心するが、サイガはフツと笑ってそれに返す。

サイガ

「簡単な事だ 。これはただの刀ではない!!!」

シグナム

「!!!」

突然、サイガの刀が光を 雷光を放ち、その姿を変える。

サイガ

「はああっ!!!」

サイガはシグナムをその剣ごと押し返し、軽く距離を取る。

シグナム

「刀が 変わった ?」

サイガ

「これが俺の本当の刃、『七支刀』だ！」

サイガは刀身から7つの刃が生えた剣を翳し、その名を叫ぶ。

そして、その刃が再び雷光を放ち、轟音を訓練場全体に鳴り響かせる。

サイガ

「行くぞシグナム!!」

シグナム

「!!!」

今度はサイガが剣を構え、シグナムに斬り掛かる。

サイガ

「七天伐刀！！！！」

シグナム

「くっ！！」

ガキイイイイン！！！！

サイガは雷を纏った斬撃をシグナムに浴びせるが、シグナムも負けじとそれを受け止める。

しかし、

サイガ

「はあああっ！！」

シグナム

「ぐっ！？」

斬撃を受け止め切れなくなったシグナムは、後方へと吹き飛ばされる。

シグナム

「レヴァンティン！ カートリッジロード……！」

シグナムの言葉に反応し、レヴァンティンが炎を纏つ。

シグナム

「今度はコツチの番だ……！」

サイガ

「来い……！」

シグナムの言葉にサイガは剣を構える。

シグナム

「紫電一閃……！」

サイガ

「七天伐刀……！」

ギィィィィィィン……！！！！！！

炎を纏った斬撃と雷を纏った斬撃がぶつかる。

そして、数十秒の間、互いに1歩も退かなかった。

しかし、それ故に、その激突は互角に終わり、互いに吹き飛ばされる。

が、シグナムは吹き飛びながらも、空中で追撃を掛ける。

シグナム

「レヴァンティン！ シュランゲフォルム！！」

サイガ

「っ！！」

その瞬間、シグナムの剣が連結刃となり、サイガを襲う。

サイガ

「くっ！！」

サイガは瞬時に身を反らし、その攻撃を避け、地上に降りる。

シグナムも同時に地に降り立つ。

シグナム

「躲したか」

サイガ

「ギリギリな。だが、当たれば危なかった」

シグナム

「フツ、心配するな。どうせ非殺傷設定だ、大した傷はつかん」

その言葉にサイガは反応した。

サイガ

「非殺傷？ ならばお前は本気ではないと言う事か？」

シグナム

「ああ。他にも出力リミッターを掛けているからな。本気を出したくても出せん」

サイガは考えた。

ならばこじこじよつと。

サイガ

「そうか。ならば俺も力を抑えよう」

シグナム

「何！？ それは許さん！ 本気で戦え！！」

シグナムはバトルマニアだ。

強い奴と戦いたい。

その相手が手加減しているのだ。

それは怒気も湧こつと。

サイガ

「心配するな。力を抑えると言っても、ダラダラやるつもりはない。お前を倒せるギリギリのところまで力を落とすんだ」

シグナム

「っ!」

シグナムは正直さらに怒りが湧きそうになったが、それを凌駕するほどに、“倒す”と断言したサイガの力に興味が湧いた。

シグナム

「フフツ、面白い！ やってみるがいい!」

シグナムは連結刃をうねらせ、戦士の笑みを浮かべる。

それを見たサイガは思った。

そして誰にも聞こえないほど小さく呟いた。

サイガ

「炎の剣技、連結刃、好戦的な性格。フツ、面白いほど合致しているな」

その呟きの意味は眼の前のシグナムの技、武器、性格が表している元の世界の仲間達の特徴だった。

同じく炎の剣技を得意としていた飛天の王。

同じく連結刃を操っていた鎧羅の王。

同じく好戦的な性格をしていた獣牙の王。

そんな事を思いながら、サイガは懐から1つの水晶を取り出した。

シグナム

「(何だ?)」

シグナムはサイガの行動を警戒して見ている。

サイガ

「行くぞ。我龍天聖!」

その瞬間、サイガが取り出した水晶から1匹の蒼い龍が現れた。

シグナム

「っ!! 召喚魔法!?!」

シグナムが驚いていると、龍がシグナム目掛けて向かって来た。

龍

「ガアアアアアア!!!」

シグナム

「くっ!!! 飛竜一閃!!!」

シグナムは連結刃で向かって来る龍を攻撃する。

しかし、その攻撃が龍に当たり、龍が刃に喰らい付いた瞬間、

シグナム

「ぐっ!? ぐああああ!!!」

突然、龍が雷に変わり、その連結刃を伝ってシグナムを襲う。

シグナムは倒れそうになったが、何とか立て直し、連結刃を元に戻す。

シグナム

「(くっ! あの龍自体が雷撃の塊か!) ……!!!」

その時、遠目にサイガが剣を構えているのが見えた。

シグナム

「くっ！！ レヴァンティン、私の甲冑を！！」

シグナムが甲冑を纏い、敵の攻撃に備えた時、気づいた。

遠目に見えていたサイガの姿が消えているのを。

そして、背後から気配を感じるが、遅かった。

サイガ

「電光刹華」

シューイイイイン！！！！

シグナム

「がはっ！！！！」

瞬間、シグナムは纏っていた甲冑を斬り裂かれ、その場に倒れこんでしまう。

そして、そんなシグナムにサイガが近寄り一言。

サイガ

「俺の勝ちのようだな」

軽く笑みを浮かべ、勝利宣言をする。

シグナム

「ハア、ハア、ハア　　フツ、そのようだな　　」

シグナムも又、軽く笑みを浮かべてそれを認める。

さらに、サイガに1つの質問をする。

シグナム

「1つ、訊きたい　　。お前は、本当に手を抜いていたのか？」

サイガ

「お前のような強者を相手に、そんな訳がないだろう　　」

サイガは静かに答える。

だが、それは嘘だった。

この時サイガは実力を半分も出していなかったのだ。

シグナム

「そうか」

サイガの答えを聞いたシグナムは静かに眼を瞑った。

だが、実はサイガの嘘を見抜いていたのだ。

シグナム

「（フツ、本気だと？ アレだけ力をぶつけておいて、息も乱さず涼しい顔をしている奴がよく言うものだ）」

シグナムは心の中で呟くだけで、それを口にする事はなかった。

その時、シグナムは何か違和感を覚えた。

何か、体が浮いているようなそんな感覚と、背中と足の部分に触れる人肌の感触があった。

シグナムがそつと眼を開けると、かなり近い距離にサイガの顔があった。

シグナム

「っ！！！！」 / / /

突然の事でシグナムは驚くが、次第に状況を理解し、その頬を紅潮させる。

サイガに抱えられていたのだ。

通称：お姫様抱っこ

シグナム

「なななな、何を、何をしているんだ！？ / / /」

サイガ

「ん？ いや何、俺が最後の攻撃をした際、お前の動きを鈍らせるために体内に電流を流したのでな。動かし辛いだろう？」

そう言われてシグナムは四肢を動かそうとするが、若干動かし辛  
と感じる。

サイガ

「だから俺が運ぼうとしているんだ」

シグナム

「し、しかしっ      / / /」

サイガ

「フツ、遠慮するな」

シグナム

「ぐうう      / / /」

サイガの微笑みを見たシグナムは、それ以上の弁解は無駄と悟り、  
おとなしくサイガに抱えられる事にした。

そしてそのまま訓練場を後にする。

観覧スペース

ポカ〜ン

観覧スペースに流れる空気を文字にするとそんな感じだった。

スバル

「す、すごい」

エリオ

「シグナムさんに」

キャロ

「勝っちゃった」

ティアナ

「」

フォワードの4人はサイガの実力に驚愕していた。

なのは

「（リミッター付きとは言え、シグナムさんも相当強いのに）」

フェイト

「（私も戦ってみたいな）」

はやて

「（こゝ、これは予想以上の援軍やな）」

隊長陣3人も同じだった。

若干1名には少し火がついてしまったようだが。

そして、残りの2人も。

ヴィータ

「アイツかなり強えな。なあ、ライン」

ライン  
「」

ヴィータ  
「お、おい、ライン？」

ライン  
「はい？」

ヴィータ  
「あの 顔が恐えんですけど」

ライン  
「ナンデシヨウカ？」

ヴィータ  
「な、何でもねーです」

色々と大変な事になりそうだ。

ヴィータはそう思ったと言っ。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

第3話 〱剣戟〱 サイガ vs シグナム（後書き）

前書きで進みがいいと言ったけど、逆に『破滅大戦』があんまり進んでない

私如きが掛け持ちとか無謀だったか

しかあーし！

私はどちらも止めない！！

必ず2つとも完結させてみせる！！！！

圧倒的な力を見せつけ、さらには色々なフラグを立ててしまったサイガ。

そして、サイガの身の上が語られる。

感想、指摘、要望、質問お待ちしております。

次回 〱開示〱 聖龍の事情

第4話 く開示く 聖籠の事情（前書き）

説明って難しいと改めて思いました。

では、どうぞ

## 第4話 〽開示〽 聖龍の事情

【3人称side】

サイガ vs シグナムの模擬戦の後、2人は医務室でシャマルの治療を受けた。

その際に、サイガはなのは達からフォワードの4人を紹介してもらい、4人それぞれと挨拶を交わしてその日はお開きとなった。

そしてその翌日、食堂にて訓練後の朝食を食べると同時に、サイガへの質問タイムが設けられていた。

はやて

「さて、色々訊かせてもらっつで？」

サイガ

「あ、ああ」

はやてにグイッと詰め寄られ、サイガは少々たじろぐ。

はやて

「まず1つ目、この服何なん？」

はやてはサイガの着物を指差し、さらに小さめの空間モニターにサイガの着物が変化する瞬間を映す。

サイガ

「これは“聖龍の衣”と言ってな。俺がいた国の御神木“聖龍木”から採れる特殊な魔力の繊維で作られた着物で、今は普通の着物だが、俺が魔力を解放すると戦闘形態になるんだ。それがその画面に映っているものだ」

なのは

「その“聖龍”って何なの？」

サイガ

「“聖龍”とは俺達の部族名だ。俺の世界には4つの部族があり、俺達の部族は“聖龍族”と言う。ちなみに、他の3つの部族は“獣牙族”、“飛天族”、“鎧羅族”と言って、4部族にはそれぞれの別の身体的特徴を持っている」

フェイト

「身体的特徴？」

サイガ

「獣牙族は獣のような尾を持ち、飛天族は翼を持ち、鎧羅族は頑強な体躯や甲殻、鎧などを持つ。そして俺達聖龍族の特徴は、この角だ」

サイガは自分の角を指差しながら説明する。

はやて

「へえ、この角本物やったんや」

はやてはサイガの角を触りながら言う。

リイン

「は、はやてちゃん！ 失礼ですよ！」

その不躰な行動にリインは驚き、制止を掛ける。

しかし、その内心には自分が先に触りたかったと言うのもあるかも？

サイガ

「落ち着け、リイン。別に触られたからと言ってどうなるものでもない。まあ、正直あまり触って欲しくはないが」

サイガはチラッとはやてに視線を移し、横目で何かを訴える。

はやて

「あ、ああ、ゴメンゴメン」

その意図を感じ取ったのか、はやては角から手を離す。

スバル

「それにしても、サイガさんの世界の人達って変わってるね」

エリオ

「確かに。尻尾や翼、甲殻を持つてる人なんてそうはいませんからね」

サイガ

「そうなのか？」

スバルとエリオの咳きに、サイガは少し驚いたような表情を見せる。

そして同時に思う。

確かに言われてみれば、その特徴を持った者を見かけない、と。

ティアナ

「まあ、多分珍しいと思いますよ」

キャラ

「部隊長がそんなに興味津々なくらいですから」

キャラの言葉を聞いたはやては、

はやて

「んんっ！ じゃあ次の質問」

わざとらしい咳払いを1つして、次の質問へ移行するため、モニターに別の映像を映し出す。

はやて

「サイガさんが持つてるこの“剣”と“玉”は何や？」

映像には刀身から7つの刃が生えた剣と、サイガが懐から出した水晶が映っていた。

サイガ

「この剣は聖龍族に代々伝わる『七支刀』と言う剣で、玉の方は『聖龍玉』と言う聖龍族の宝玉だ」

なのは

「七支刀」って確か、昔の日本にあった剣の名前だよな？」

はやて

「そうだな、確かにそう言われると似てるな」

なのはとはやては自分の故郷、日本に伝わる剣を思い出す。

ヴィータ

「この玉から出て来た龍は何なんだ？ 召喚魔法か？」

映像が切り替わり、そこに映る蒼い龍についてヴィータが訊ねる。

サイガ

「いや、これは召喚ではない。俺の雷の魔力を聖龍玉に籠め、それを龍の形で具現化したものだ。実際に受けたシグナムはわかると思うがな」

シグナム

「ああ。アレは龍ではなく、雷撃そのものだった」

シグナムは自分を襲った雷撃を思い出していた。

はやて

「なるほどなあ。けど、そんなお宝みたいな物を持ってやるやなんて　サイガさん、何者なんや？」

はやてはサイガに直球で訊ねてみた。

訊ねられたサイガはと言うと、正直困惑していた。

ここで何と言うべきか、と　。

しかしまあ、一応まだ“神”と言う事や、この世界に迫る危機については伏せておく事にして、こう説明した。

サイガ

「俺は聖龍族の部族王、“聖龍王”だ」

はやて

「え？」



「えっと　王様って事は　」

なのは

「私達　」

はやて

「大変なご無礼を！！」

はやてが瞬間的に頭を下げる。

他の一同も釣られるように頭を下げようとするが、

サイガ

「い、いや、別に構わないぞ」

フェイト

「で、でも　私呼び捨てにしてたし　」

王に対して呼び捨てはかなりヤバイ。

サイガを呼び捨てにしていたフェイトは負い目を感じ、同じく呼び捨てにしていたシグナムとヴィータもどこか申し訳なさそうだった。

そんな3人や他のメンバーに対し、サイガは優しく微笑んだ。

サイガ

「構わないさ。俺達はもう仲間だ。仲間内でそんな遠慮は無用だ。普通に話してくれればいい」

サイガにそう言われ、一同は少しホッとした。

サイガ

「それに、俺はもう部族王ではないからな」

はやて

「え？ そうなんか？」

サイガの呟きに一同はさらにホッとした。

が、それはホンの一瞬の事で、急転直下驚きが変わる。

サイガ

「ああ。王を退いて神羅連和国の皇帝になったんだ」

ALL

「

」

最早声も出なかったと言う。

その後、質問タイムは終了となったが、最後の方の事が衝撃的過ぎて、結局何を話したかあまり覚えていなかったらしい。

その日の午後、はやては1人部隊長室で寛いでいた。

はやて

「はあ、今日は何かいつも以上に疲れたな」

朝食時の事を思い出し、ドッと疲れたような感覚がはやての上に押し掛かり、深い溜息をつく。

はやて

「でも、やっぱりサイガさん 只者やなかったな」

どこか王族のような威光と言つか、雰囲気を感じる。

それがはやてがサイガと初めて対面した時の印象だった。

はやて

「って言うか サイガさん、一体歳幾つやねん」

自分達と同じ年くらいに見えるが、部族王で国を治める皇帝で

そんな事を思いながら、はやてはサイガの歳に対して疑問を抱いたと言つ。

はやて

「はあ、サイガさん ホンマに不思議な人だな」

そう言いながら自分の机に突っ伏すはやては、サイガの事ばかり口にしていた。

サイガの事が何故か気になっていた。

はやて

「サイガさん

」

そう静かに呟き、はやてはそのまま眠ってしまった。

T o b e c o n t i n u e d

第4話 〱開示〱 聖龍の事情（後書き）

やっぱオリジナルの設定とか話とか

疲れる（ - - ; ）

でも頑張ります！

感想、指摘、要望、質問お待ちしております！

ではまた。

次回 〱訓練〱 王の手解き

第5話 〱 訓練〱 王の手解き(前書き)

ちよつと時間軸を変えました。

“リニアレール事件前”を“ホテル・アグスタ前”にしました。

すみません。

タイトルには“手解き”であるけど“手解き”って感じじゃないかも

後若干サイガが恐いかな？

取りあえず、どうぞ

第5話 〽訓練〽 王の手解き

【3人称side】

訓練場

ある日のフォワード達の訓練。

訓練場で4人はその日の教導の担当であるのはを待っていた。

しかし、

エリオ

「遅いですね、なのはさん」

ティアナ

「そうね。なのはさんに限って遅刻なんて考えられないけど」

予定していた訓練開始時刻を過ぎてもなのはが来ない。

4人は少し心配して、どうするかを相談していた。

その時、

????

「遅れてすまない」

訓練場に担当教導官が入って来た。

しかし、どう聞いてもなのは声ではないし、況してや女性のソレでもない。

声のする方へ視線を移すと、

スバル

「あれ？ サイガさん？」

戦闘装束を纏ったサイガがやって来た。

ティアナ

「どうしてサイガさんがここに？　なのはさんはどうしたんですか？」

サイガ

「なのはは急な仕事が入ったらしくてな、急遽俺が頼まれたんだ。と言う訳で、今日は俺が教導官を務める」

どうやらなのはが来れなくなったので、代わりとして来たらしい。

事情を確認した4人はサイガの前に整列し、訓練前の礼をする。

ALL

「「「よろしくお願いします!!!!!!」」」

サイガ

「ああ、よろしく。さて、いつもどんな訓練をやっているかはわからないが、なのはからは俺の自由にしていると言われているのでな、今日は俺の指示に従ってもらう」

ティアナ

「それで、何をするんですか？」

ティアナが訓練のメニューをサイガに訊ねる。

サイガ

「そうだな、お前達がどれほどの実力を持っているのかを知りたいから、俺と模擬戦をしてみらおうか」

エリオ

「模擬戦　ですか？」

サイガから告げられた訓練のメニューに、4人は少し顔を引き曇らせた。

先日の模擬戦でシグナムを降し、元の世界では一部族を纏める王であり、国を統治する皇帝であったサイガとの模擬戦はかなりハードなものだと感じたからだ。

その様子に気づいたのか、サイガは4人に対して軽く笑いながら言う。

サイガ

「ハハハッ、心配するな。言っただろ？　“お前達の実力が知りたい”と　。何も全力でやり合う訳ではない」

サイガにそう言われ、ホッと胸を撫で下ろす4人。

キヤロ

「それでその、誰が戦うんですか？」

サイガ

「フム、そうだな」

キヤロの質問を受けたサイガは、暫らく眼を瞑り、腕を組んで考える。

そして数十秒後、結論を出す。

サイガ

「1人1人の力も見てみたいが、お前達は1つの小隊らしいからな  
。4対1で戦うでしょう」

エリオ

「4対1 ですか？」

サイガ

「ああ。今回はお前達の連携を見せてもらおうとしよう。異論は無い  
か？」

ALL

「『はい！！！！』」

4人は返事をした後、それぞれデバイスを起動し、バリアジャケットを纏う。

そして、既に準備を完了させていたサイガと対峙する。

サイガ

「準備は出来たようだな。では、始めるとしよう」

サイガは鞘から刀を抜き、臨戦態勢に入る。

その様子に対し、ティアナが少し疑問を抱いた。

ティアナ

「？ 七支刀は使わないんですか？」

サイガは臨戦態勢に入っていたが、その手に握られているのが普通の刀だからだ。

そんなティアナの疑問に対し、サイガはフツと笑い、

サイガ

「俺が七支刀を使うかどうかは

お前達次第だな

」

と一言。

それを聞いたティアナは少しムツとして

ティアナ

「みんな、サイガさんには敵わないかも知れないけど  
七支刀くらいは使わせるわよ！」

せめて、

力強く、その意気込みを言葉にする。

スバル

「うん！」

エリオ・キャロ

「「はい!!」」

他の3人もそれに同意し、身を構える

スバル

「行つくぞおおおお!!!」

と思いきや、スバルが単身サイガに特攻を掛ける。

サイガ

「フツ

」

サイガは慌てずにそれに対処し、スバルの攻撃を軽く往なす。

しかし、

エリオ

「はあああつ!!!」

サイガ

「!!!」

スバルの攻撃を往なすと、連続でエリオが攻撃を仕掛けてきた。

サイガはエリオのデバイス『ストラーダ』による突きを躲し、エリオに対して迎撃を掛ける。

キャラ

「我が乞うは疾風の翼 若き槍騎士に 駆け抜ける力を！」

キャラの詠唱の後、エリオがサイガの迎撃を躲し、その背後に回り込む。

サイガ

「（！！！ 機動力が上がった！？）」

エリオ

「おおおおお！！！！」

サイガの背後から斬撃を繰り出すエリオ。

しかし、

ギィィィィン！！！！

エリオ

「っ！！！！」

サイガ

「はああっ!!」

サイガはエリオの斬撃を受け止め、シグナムとの模擬戦の時同様、槍ごとエリオを押し返す。

その間にも別の攻撃がサイガに迫っていた。

キヤロ

「ティアさん！ 撃ってください!!」

ティアナ

「わかった！ クロスファイアシュート!!」

ティアナのデバイス『クロスミラージュ』からオレンジ色の魔力弾が放たれる。

サイガ

「くっ!!」

サイガは自分の前に雷の防御壁を展開し、魔力弾を防ぐ。

しかし、

サイガ

「っ！！」

ドオオオン！！

雷と魔力弾が弾け、爆風を起こす。

その爆風によってサイガは少し体勢を崩すが、すぐに立て直し、再び身を構える。

114

サイガ

「思ったより威力が高いな」

サイガは少しの思考時間を設け、エリオの機動力の上昇、ティアナの放った高威力の魔力弾についての答えを導き出す。

サイガ

「（なるほど　キャロか）」

そして、僅か数秒の思考でそれを導き出した。

サイガ

「（キャラコの魔法は恐らく補助系のもの。それによってエリオの機動力とティアナの魔力弾の威力を上げたと言う事が）ならば！！」

サイガは少々手荒な作戦を決行する。

サイガ

「先にキャラコを狙わせてもらおう！」

キャラコ

「っ！！！」

キャラコに与えるダメージを最低限にするため、サイガは魔力を抑え、刀の峰を返す。

そして、キャラコに斬り掛か

スバル・エリオ

「「させるかあ！！！」」

サイガ  
「っ!!！」

ろうとしたが、スバルとエリオがその間に割って入った。

しかも、2人共キャロの補助魔法を受けているようで、機動力が通常よりも高い。

エリオ

「はあああっ!!!!！」

サイガ

「くっ!!！」

ギィィィン!!!

エリオの斬撃を辛うじて受け止めるサイガ。

しかし、本日最大の攻防が訪れる。

ティアナ

「エリオ下がって!!」

ティアナの指示を受け、エリオはキャロの許まで下がる。

ティアナ

「行くわよ、スバル!!」

スバル

「オーケー、ティア!!」

2人はサイガを挟み撃ちにする形で攻撃を仕掛ける。

サイガ

「（来るか!?!）」

サイガもそれを感じ取り、身構える。

スバル

「デイベイイイイン　バスタアアア!!!!」

ティアナ

「クロスファイア　シューーート!!!!」

片や1本の砲撃で、片や無数の魔力弾で、両側からサイガを狙い、

ダアアアアン!!!

すべてサイガに命中する。

スバル

「やった!？」

ティアナ

「さあ。でも、流石のサイガさんもこれなら　　っ!!!」

砲撃と魔力弾の爆発によって生じた黒煙を見ていたティアナの眼に、  
驚愕の光景が飛び込んできた。

流石に倒すまでは行かなくとも、ダメージや手傷くらいは負わせられる筈。

ティアナはそう思っていたが、現実とは違っていた。

サイガ

「思ったよりやるじゃないか」

黒煙が晴れると、その中心にはほぼ無傷で息一つ乱れぬサイガが立っていた。

キヤロ

「そんな」

エリオ

「アレを喰らって 無傷!？」

その姿に全員が驚愕する。

サイガ

「さて、確か “せめて七支刀は使わせる” だったか？」

その言葉に4人は若干の寒気を感じた。

最初はそれが目標だったが、今となっては最早脅威でしかなかった。

サイガ

「お望み通り、使ってやろう」

ALL

「ひいひい！！！！」

その後、持っていた刀を七支刀へと変化させたサイガは、存分に新人達を扱いた。

サイガ

「今日はこれで終了だ、ご苦労だったな」

ALL

「あ、ありがとう、ございました」

あの後数十分間に亘り、サイガから手解きを受けた4人は、最早しつかりと返事をする気力も無かった。

サイガ

「ゆっくりと休めよ？ 明日もまだ訓練があるそうだから」

ALL

「はあ〜」

サイガの言葉に4人はとても深い溜め息を吐き、肩をガツクリと落とした。

その姿を見たサイガは、苦笑しながら訓練場を後にする。

サイガ

「（新人魔導師と言っていたが、あの4人は相当強いな。なのは達が期待を寄せるのも頷ける）」

訓練場を後にし、隊舎の廊下を歩くサイガはそんな事を考えていた。

サイガ

「（いつの時代もあるものだな “期待の新星” と言うものは）」

この一件以来、サイガはフォワード4人の将来がとても楽しみにな

つたるとし。

T o b e c o n t i n u e d

第5話 ㄱ訓練ㄱ 王の手解き(後書き)

今回はサイガがある人物と街へ出かけます。

フラグは

ニヤッ

感想、指摘、要望、質問等お待ちしております。

ではまた

次回 ㄱ外出ㄱ 俗に言うデート

第6話 く外出く 俗に言うデート（前書き）

今回、ファッションに関する描写が出て来ますが、作者はそう言うのに疎いんで、正直おかしいかも知れませんが、どうか温かい目でみてやってください。

では、どうぞ

## 第6話 く外出く 俗に言うデート

【3人称side】

サイガが機動六課に協力する事になってから凡そ1週間が過ぎたあの日の事。

サイガははやてにある相談をするため、部隊長室に来ていた。

その相談とは

はやて

「街を見てみたい？」

サイガ

「ああ。異世界の文化と言うものを色々調べてみたんだが、やはり直にその文化を見てみたくなってるな」

まあ簡単に言うと、遊びに行きたいと言う訳だ。

サイガ

「そこで相談なんだが、街を案内してくれないか？」

しかし、如何にサイガと言えど、初めての異世界の街を1人で練り歩くには多少の不安がある。

そこで、誰かに案内してもらおうとはやてに相談したのだが、

はやて

「うーん、困ったな。私はまだ仕事が残ってるし、なのはちゃんとヴィータはフォワードの訓練中やし、シグナムとリインもそれぞれ仕事中止やし」

はやてが思いつくメンバーは、誰も彼もその任に就く事が出来ない。

その時、

????

「私が行こうか?」

部隊長室のドアが開き、フェイトが入って来た。

はやて

「ん? フェイトちゃんか?でも仕事は?」

はやては思った。

“ 確かフェイトにも仕事があった筈だが ” と。

フェイト

「 意外と早く終わったから大丈夫だよ。どうするサイガ？ 私でよければ案内するけど 」

フェイトは早めに仕事が片付いたので戻ってきたのだが、丁度その時に2人の会話が聞こえたので、自分が案内役を買って出たと言う訳だ。

そして、改めてサイガにそれを訊ねる。

サイガ

「 そうか。それじゃあ、よろしく頼む 」

サイガはそんなフェイトの厚意に甘える事にした。

フェイト

「 うん。それじゃあ準備するから、先に外に行って待っていてくれる 」

？」

サイガ

「わかった」

フェイトは外出準備やその他諸々の手続きを済ませるため、部隊長室を後にした。

サイガもフェイトに言われたように外へ行こうとした時、

はやて

「サイガさん、これ」

はやてに呼び止められ、封筒を手渡される。

サイガ

「これは？」

サイガはその封筒を受け取りながらはやてに訊ねる。

はやて

「サイガさんのお金や」

サイガ

「俺の？」

それは次元漂流者であるサイガに支給されたお金だった。

当たり前の話だが、サイガはこの世界では無一文である。

そんなサイガを支援するため、ある程度のお金が支給される事となった。

しかし、当の本人は少し戸惑っていた。

ただでさえ居候のような身で、迷惑も掛けているだろうに、お金まで

そう思ったサイガはそのお金を受け取る事を躊躇った。

しかし、はやてが「遠慮せんと」と言い、ニツコリと笑い掛けてくるので、サイガもそれ以上は失礼になると判断し、有り難く封筒を受け取った。

サイガ

「じゃあ、行って来る」

サイガははやてにそう告げ、部隊長室を後にした。

フェイトとサイガが出払った後、部隊長室で1人となったはやては、

はやて

「はああ」

「

深い溜息をつき、椅子の背凭れに体を預ける。

そして、そのまま数分間、部屋の天井を見つめていた。

はやて

「（私も行きたかったなあ

）」

そんな事を考えているはやての表情は、前線部隊の部隊長のものではなく、1人の女の子の顔だった。

サイガが六課の隊舎前でフェイトを待っていると、黒い車がサイガの前で止まった。

フェイト

「お待たせ」

その車の中から、フェイトが出て来た。

どうやらフェイトの車のようだ。

フェイト

「サイガ、その格好」

車から降りて最初にフェイトの眼に留まったのはサイガの服装。

それはサイガが普段着ている白い着物ではなく、余所行きと思われる

る黒い着物だった。

サイガ

「ああ。外に行くならこっちの方が良いかと思ってな」

フェイト

「へえ」

フェイトは数秒間サイガの服装を眺める。

サイガ

「やっぱり、変か？」

そんなフェイトの様子に、サイガは少し不安になった。

そう思ってフェイトに問い掛けるが、返事が無い。

サイガ

「フェイト？」

フェイト

「ふえ！？」

サイガの呼び掛けにやっと反応したフェイトは素頓狂な声を上げる。

サイガ

「どうした？ やっぱりどこか変か？」

サイガは改めて抱えている不安をフェイトに問い掛ける。

フェイト

「う、ううん！ そんな事無いよ！ 似合ってるよ！」

サイガ

「そ、そうか」

フェイトのあたふたとした答えにサイガは若干の疑問を抱きながらも、一応話題を終了させた。

そんなフェイトはと言つと

フェイト

「（ ちょっと見蕩れちゃった ）」

心の中で小さく呟き、

フェイト

「 / / / 」

少し頬を赤らめた。

そんなこんなで、2人は車に乗り、街へと向かった。

その道中の車内

ひよんな事からサイガの世界の話になった。

サイガ

「これが“車”か」

サイガは車のシートに座りながら、車内を見回していた。

フェイト

「サイガって車乗った事無いの？」

そんなサイガの様子に、フェイトは小さな笑みを浮かべながら訊ねた。

サイガ

「俺達の国にはこう言った物が無かったからな。どちらかと言えば、これは鎧羅の領分だ。」

機械技術が進歩していた鎧羅族の国では車のような機械はありふれていたかも知れない。

しかし、サイガ達聖龍族の国は“機械大国”である鎧羅の国とは真逆の“魔法大国”。

豊かな自然の中にあつたため、そんな技術は一切存在しなかった。

そうこうしている間に、車は市街地へと入っていた。

そして、フェイトは駐車場に車を止め、街へと繰り出した。

フェイト

「サイガはどこに行きたい？」

サイガ

「そうだな。お前達を見ていて思ったんだが、異世界の服と言  
う物を見てみたいな。」

サイガはフェイト達が着ている服や、街行く人達が着ている服に興  
味があつた。

自分達の世界にも様々な服があつたが、この世界にあるのはそれと  
は又違つた物。

それは興味も湧く。

フェイト

「それじゃあ先ずはアパレルショップに行こう。」

サイガ

「ああ。任せるよ。」

2人は目的の店を目指して歩き出した。

サイガ

「おお」

」

目的の店に入ったサイガの眼に驚愕の光景が飛び込んできた。

店中にズラリと並んだカラフルな装束。

お洒落にあまり関心が無いサイガも、これには正直圧倒された。

サイガ

「これは

すごいな

」

無意識の内にそう呟いていた。

フェイト

「どぶつ？

試着してみる？」

フェイトはサイガに試着を勧めるが、正直サイガには上手く着こなす自身が無かった。

そこで、

サイガ

「じゃあフェイトを選んでくれないか？」

フェイト

「え？ 私が？」

コーディネイトをフェイトに頼む事にした。

それと言つのも

サイガ

「フェイトはセンスが良さそうだからな」

と思ったからだ。

別段、それ以外の意味を含まない一言だったのだが、

フェイト

「う、うん わかった / / /」

フェイトは何故か顔を赤らめ、そそくさと服を選び始めた。

そして数分後、数点の商品を手にして戻り、サイガに手渡す。

サイガはそれを受け取ると、試着室に入って着替えを始める。

それを待つフェイトの顔はいまだ少し赤い。

選びながらサイガがそれを着たところを想像したりしていたからだ。

そしてさらに数分後、試着室のカーテンが開く音がしてフェイトが振り返る。

そこには、

サイガ

「一応着てみたが どうだ？」

無地の白いVネックにカジュアルな黒いジャケットを重ね、グレーのデニムパンツを穿き、首に小物の銀のアクセサリーをつけ、黒いブーツを履いたサイガがいた。

特に派手と言ったファッションでは無く、かと言って特別ダサイ訳でも無い。

そもそも、それを着こなす素材のレベルが高いため、誰が見ても基本的な感想は

“カッコいい!”

となるだろう。

そして、フェイトはと言つと、

フェイト

「(カ　　カッコいい　　)　　/ / /」

基本的な感想を抱き、眼の前のサイガに見蕩れ、頬を朱色に染めていた。

サイガ  
「フェイト？」

フェイト  
「ふえ！？」

サイガ  
「今日で2回目だぞ、それ」

サイガの呼び掛けに、出発前同様素頓狂な声を上げるフェイト。

そんなフェイトの反応に、サイガはまたしても不安となった。

サイガ  
「やっぱりこう言う服は俺には合わないか。悪いな、折角選んでもらったのに」

決してフェイトのセンスを責めず、わざわざ選んでもらった服を着こなせない自分が悪いとし、頭を下げる。

フェイト

「え？ ち、違うよサイガ！ 大丈夫！ 似合ってるよ！ ちゃんと似合ってるから！」

フェイトはサイガの律儀な態度に、又も出発前同様あたふたしながら必死にサイガを慰める。

サイガ

「本当にそう思うか？」

フェイト

「うん！ 本当だよ！ すごく似合ってるし すごく、カッコいいよ / / /」

最後の方は少しゴニョゴニョとなってしまうが、フェイトの必死さが伝わったのか、サイガは軽く笑う。

サイガ

「そうか 。 ありがとう、フェイト」

そして、フェイトに対して穏やかな微笑を向ける。

フェイト

「っ！！ / / /」

その微笑にフェイトの顔はさらに真っ赤となった。

サイガ

「フェイト、大丈夫か？ 顔が赤いが」

フェイト

「だ、大丈夫！！と、所でサイガ その服どうするの？」

サイガに紅潮した顔を指摘され、慌てふためくフェイトの取った打開策は、

“話題変更”

サイガ

「そうだな。折角フェイトが選んでくれたんだ。これを買ってくる」

作戦は見事に成功した。

サイガは今試着している服や他にフェイトが選んだくれた服を買うため、1人レジの方へ向かう。

そして、購入した服を着て、再びフェイトと2人で街へと繰り出した。

その後、サイガはフェイトに街を案内してもらい、存分に街を堪能した。

その間、サイガは物珍しさに街を見渡し、フェイトはそんなサイガを終始笑顔で見つめていた。

そんな楽しい時間はあっという間に過ぎ去り、時刻は夕暮れ時。

2人は六課へ戻るため、駐車場へと向かって歩いていった。

サイガ

「今日は楽しかった。ありがとう、フェイト」

フェイト

「うん。私も楽しかったから、お礼なんていいよ」

サイガ

「フツ、そうか。しかし、また来たいな」

フェイト

「えっ？」

サイガの何気ない呟きに反応するフェイト。

フェイト

「（も、もしかして　　）」

その胸中には、ある期待を抱いていた。

しかし、

サイガ

「また来るとしよう　　。今度はみんなだな　　」

フェイト

「えっ？」

サイガの口から出た言葉はフェイトの期待していたものでは無かった。

それを受け、フェイトは軽く肩を落とした。

サイガ

「ん？ どうした？」

フェイト

「え？ い、いや、別に 何でも無いよ」

サイガ

「??？」

サイガはそんなフェイトの様子を気に掛けるが、本人に「大丈夫」と言われ、首を傾げながらも再び前を向いて歩く。

その時フェイトはこんな事を思っていた。

フェイト

「（何で、私 ちよつとがっかりしたんだろ）」

そんなモヤモヤを抱えながら、フェイトはサイガと共に六課へと帰っていった。

フェイト

「ただいま、はやて」

サイガ

「今戻った」

はやて

「お帰り。サイガさん、その服カッコええわ」

六課へと帰って来た2人は、部隊長室に来ていた。

その際、はやてはサイガの服装に見蕩れて我を失いそうになったが、部隊長の意地で何とか踏み止まり、改めてサイガの服を褒める。

はやて

「で、どやった？ ミッドの街は」

サイガ

「ああ。とても楽しかった」

サイガの満足と言う感情は、その表情からも窺えた。

はやて

「そっかそっか　それは良かった」

それがわかり、はやても笑顔になる。

サイガ

「戻ってすぐで悪いんだが、部屋に戻ってもいいだろうか？　流石に疲れてな」

はやて

「うん、ええよ。ゆっくり休んで、また明日から仕事手伝ってな！」

サイガ

「ああ。じゃあな」



はやて

「おお、ナイスリアクション」

はやてが投下した爆弾がフェイトの思考を吹き飛ばした。

フェイト

「デ、デートって ええ！？ デデデデ、デートオ！？」

フェイトは見事なりアクションの後、見事なパニックも起こして見せた。

そんな様子にはやては、

はやて

「（やっぱりか）」

何かを確信していた。

そして、

はやて

「（私もうかつかしてられへんな）  
「

何かを決心していた。

T  
O  
B  
E  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

第6話 へ外出へ 俗に言うデート（後書き）

サイガのキャラがわからなくなってきた

とほほ

感想、指摘、要望、質問等お待ちしております。

ではまた

次回 へ観察へ リンが見るサイガの日常

第7話 く観察く リインが見るサイガの日常(前書き)

今回は最初から最後まで、語り手・リインでお送りします。

では、ごきげん

## 第7話 〈観察〉 リンが見るサイガの日常

【リインside】

最近、すごく悩んでいます。

悩んでも悩んでも、全く足りない程悩んでいます。

その悩みの原因は、ある1つの出逢いです。

ほんの1週間とちょっと 厳密に言えば11日前、私はある男の人と出逢いました。

民間協力者として機動六課に入局した新しい仲間・サイガさん。

別に衝撃的でも無い、運命的でも無い、何て事の無い、極々普通の出逢い

ただ単に、新しい仲間との出逢い。

けど、私は

そんな出逢いをした彼に、恋をしてしまいました。

第一印象は“結構カッコいい”

ただそれだけでした。

でも、その後に見せた笑顔がとても穏やかで、優しくて

その瞬間、私は彼の事が好きになりました。

こう言うのを“一目惚れ”と言うんでしょうか？

兎に角、私はサイガさんが好きになりました。

でも、“サイガさんに恋をした事”が悩みの根本的な問題じゃないのです。

私の直感　と言うか雰囲気なのですが、彼に気があるのは私だけじゃないんです。

はやてちゃんにシグナムさん、フェイトさんも多分そうです。

何故わかるのかって？

さっき言った通り、乙女わたしの直感です！

そして私は悩んだ末、考えました。

そんな強敵達に勝つためには、彼の事をもっと知る必要がある！と。

そこで私は考えた末、思いつきました。

彼の日常を観察しよう！と。

これは、私とその作戦を決行した日の事です。

リン

「ここが サイガさんの部屋」

作戦決行日当日の朝 大体午前7時ちょっと前くらい。

私は先ず、サイガさんの部屋へとやって来たのです。

リン

「」

しかし、やって来たものの、私は激しく迷っています。

無言なのはその“迷い”の所為です。

最初は“これが良い！”と思いましたが、いざ扉の前に立つ（浮く？）と、胸の鼓動が一気に 1速からいきなり4速になるくらい一気に加速し、その扉を開くことは疎か、扉をノックする事さえ出来ない状態になってしまったのです。

リイン

「(ど、ど) どうしましょう / / /」

そんなドキドキでバクバクな胸の鼓動を抱えながら、サイガさんの部屋の前で立ち(浮き?) 尽くしていると、

サイガ

「リイン?」

リイン

「うひゃあああっ! ! !」

いきなり後ろからサイガさんが現れ、自室の前にいる私に声を掛けたのです。

てっきりまだ部屋の中になると

そう思っていた私は、突然の奇襲(?) に、自分でもビックリするくらいのビックリした声を上げてしまいました。

サイガ

「わ、悪い 驚かせてしまったな」

リン

「い、いえ　こちらこそ、取り乱してすみません」

申し訳無さそうな顔をして、軽く頭を下げるサイガさん。

私は慌てて取り繕い、同じように、サイガさんに頭を下げました。

サイガ

「それで、俺に何か用か？」

リン

「へ？」

互いに頭を上げると、不意にサイガさんに訊ねられました。

けど、色々と混乱していた私は、質問の意味を上手く掴めず、素頓  
狂な声を上げてしまったのです。

サイガ

「？　俺に用があったから部屋の前にいたんじゃないのか？」

リン

「あ、はい！ あの、朝食がまだなら、一緒にどうかなあ〜つて / / /」

サイガさんの言葉で漸く質問の意味を理解した私は、精一杯考えて捻り出した理由を述べる。

まあ、元々そのつもりでもあったんですけどね。

そして、サイガさんの答えは、

サイガ

「ああ、勿論いいぞ」

やったあああああ!!!!!!

と叫びたかったけど、そこは堪える、私。

そう自分に言い聞かせて、私は笑顔で言う。

リン

「それじゃあ行きましょう      サイガさん      」

歡喜の雄叫びは堪えたものの、その嬉しさを抑え切る事は出来ず、表情と口調にそれが出てしまっているのが自分でもわかる。

私って単純なんでしょうか？

そんな事を思いながら、私はサイガさんと並んで食堂へと向かったのです。

食堂の一角で、私とサイガさんは一緒に朝食を食べています。

ちなみに、私の朝食のメニューは、クロワッサン2つとアイスミルコココアです。

元々そんなに食べる方じゃ無いですし、体のサイズがサイズなので、逆に食べようとも思わないのです。

対してサイガさんの朝食のメニューは、ご飯に味噌汁、焼き魚に沢庵 典型的な和食です。

それを一気に食べるんじゃない、ゆっくりと味わいながら、1品1品順番に手を付けて食べているのです。

リン

「サイガさんって、随分丁寧な食べ方するんですね。そう心掛けてるんですか？」

私は見て思った事をそのまま口にしました。

サイガ

「そうか？ 別に意識してやっているつもりは無いが。まあ、あれもこれもと一度に類張るのは、あまり行儀が良いとは言えないだろう。それに、こうやって順番に食べた方が、その料理本来の味が楽しめるような気がするしな」

サイガさんって やっぱ真面目です。

改めてそう思える回答でした。

けどまあ確かに、複数の料理を代わり番こに食べるよりも、1品1品順番に皿を空ける食べの方が健康的とか聞きますし。

サイガ

「まあ、食べ方は人それぞれだろうがな」

もう一度言う事になりますが、サイガさんって結局はやっぱり真面目と言う事になりますね、はい。

私は量が量だからすぐに完食しましたが、サイガさんは結構時間を掛けて食べています。

故に、私は結構待たされる事になりましたが、別に苦ではありません。ん。

今日の目的は“サイガさんの観察”だからです！

そして十数分後、漸く食事を終えたサイガさんと共に、食堂を後にしました。

リン

「この後はどうするんですか？」

食堂を後にし、何をするでもなく、暫く隊舎の廊下を歩いて（私は飛んで）いる時、私は何気に訊ねました。

サイガ

「ん？ そうだな 別に何かをしなければならぬ訳でも無いし  
取りあえず、瞑想でもしようか」

ここで“瞑想”ってあなたはホントいつの時代の人間ですか！とツッコみたくもなりましたが、堪えました。

取りようによってはカッコいい一面ですし。

リン

「！」

その時、私は思いつきました。

そつだ、2人で街へ行こう！と

丁度、頭の上に電球が現れ、ピカツと光る感じに。

そつ、アインシュタイン張りに閃いたのでつす。

アインシュタイン知らないけど。

ライン

「サイガさん！ だつたら私と一緒に」 「リ〜イン〜」  
「！！！！！！」

私がサイガさんを誘おうとした正にその時、背後から私の名を呼ぶ声か聞こえ、思わずビクツとして、姿勢が真つ直ぐになつてしまいました。

そして、恐る恐る後ろを振り返ると、

リン

「は、はやて ちゃん」

我が主・八神はやて部隊長が仁王立ちしていました。

“仁王立ち”

これ重要です。

はやて

「ちょあゝつと仕事手伝ってくれへんかなあゝ」

はやてちゃんはとても笑顔です。

とても笑顔過ぎて、背筋がゾクゾクします。

その凍りつくような笑みが物語っていました。

“来い”と。

“ 確か今日は私の仕事は無かった筈ですが ” と思いました。

が、そんな事を言える空気ではありませんでした。

リイン

「 は、はいですう〜 」

その言葉を口にした時点で、その重圧に屈してしまった時点で、私の敗北は決定しました。

こうして、私の“ サイガさんを観察しよう大作戦 ” は、呆気なく終了してしまっただけです。

ホンの1、2時間程度の観察でしたが、私の中での結論

“ やっぱり私はサイガさんの事が大好きです ”

T o B e C o n t i n u e d

第7話 く観察く リンが見るサイガの日常（後書き）

サイガの“日常”って言うよりはサイガの“性格”でしたね。

しかもあんな終わり方

すみません。

感想、指摘、要望、質問等お待ちしてます。

って言うてもこう言う話じゃ感想とかは難しいかな？

ともあれ、お待ちしてます！

ではまた

次回 く団欒く サイガとフォワード

第8話 く団樂く サイガとフォワード(前書き)

なあくんか グダグダだなあ

取りあえず、どうぞ

## 第8話 〱団欒〱 サイガとフォワード

【3人称side】

サイガ

「よし、今日はここまでにしよう」

スバル・ティアナ・エリオ・キャロ

「「「「ありがとうございます！……！！」「」「」

いつものフォワードの早朝訓練。

ただ1つ、いつもと違うのは、担当教導官がサイガである事。

いつかの時と同じように、なのは達隊長陣の仕事が忙しく、代わりにサイガが訓練を行ったと言う訳だ。

フォワードの4人は、通常この後揃って朝食を食べに行くのだが

スバル

「サイガさんも一緒にどうですか？」

と、スバルがサイガを朝食に誘った。

サイガ

「ああ。それじゃあ一緒にさせてもらおう」

サイガはフォワードの4人と共に、訓練場を出て、食堂へと向かった。

エリオ

「サイガさんはどうしてそんなに強いんですか？」

サイガ

「ん？」

食堂の一角でテーブルを囲んでいる5人。

そんな中、エリオが唐突にサイガに訊ねた。

ちなみに、5人の朝食のメニューはと言うと

サイガ 和定食

スバル スパゲッティ（大盛）

ティアナ スパゲッティ（並盛）

エリオ スパゲッティ（大盛）

キャラ クロワッサン4つとオレンジジュース

とまあ、こんな感じだ。

ちなみにもう一つ言うと、キャラはクロワッサンを1人で食べずに、使役童であるフリードと分け合って食べている。

さて、話を元に戻そう。

エリオに問い掛けられたサイガ。

その続きだ。

サイガ

「何故俺が強いと思うんだ？」

エリオに訊ねられたサイガは、逆にエリオに問い掛けた。

エリオ

「え？ だって　すごい魔法が使えるし、あのシグナム副隊長に勝っちゃうし　」

エリオは、自分がサイガを強いと思う理由を語った。

そして、それを聞いたサイガは

サイガ

「俺はそう言うのを“強さ”だとは思わん」

と、吐き捨てた。

その言葉に、一同の頭には疑問符が浮かんでいた。

ティアナ

「それじゃあ、サイガさんにとって“強さ”って何ですか？」

ティアナがやけに神妙な面持ちで、サイガに訊ねる。

そんなティアナに、サイガは少々違和感を覚えたが、気の所為かと思ひ、それを頭の隅に追いやった。

サイガ

「ふむ　そうだな　」

自身の顎に手を当て、暫く考えるサイガ。

そして、答えを出す。

サイガ

「これは俺が勝手に思っている事だがな、“強さ”とは力を持つて  
いる事や、特殊な才能がある事じゃなく、“思い”を持っている事  
だと思っんだ」

キャロ

「“思い” ですか ？」

サイガ

「そつだ。それも、誰かのための“思い”だ」

エリオ

「誰かの ための ？」

サイガ

「ああ。誰かを護りたい、誰かを助けたい、誰かを救いたい。  
それはただの自己満足でしかないかも知れん。だが、俺はそつ言っ  
“思い”こそが“強さ”だと思っっている」

サイガの言葉を、4人は無言のまま聞いていた。

その4人中、ティアナとキャロが、妙にサイガの方を見ていた。

サイガ

「ん？ どうした、2人共」

その視線に気づいたサイガは、2人に訊ねた。

ティアナ

「いえ」

ティアナは何か言いたそうだったが、それを堪えるように視線を落とし、再びスパゲッティを食べ始めた。

サイガ

「キャラはどうしたんだ？」

サイガはやはりティアナに違和感を感じたが、“本人が言いたくないなら”と思い、視線をキャラに移す。

キャラ

「あ、えっと サイガさんって 何か お兄ちゃんみたいだなあって」

サイガ

「俺が、お兄ちゃん？ キャロの兄と俺が似ているのか？」

キャラ

「あ、いや、えっと、その 私にお兄ちゃんとかはいないんですけど 何か サイガさんって、優しいお兄さんって感じがして サイガさんが、私のお兄ちゃんならいいなあって」

キャラは「エへへ」と照れ笑いをする。

その仕草は実に可愛らしかった。

そんなキャラを見て、サイガは微笑み

サイガ

「俺なんかが兄でいいのか？」

と、キャラに問い掛けた。

キャラ

「そんな!! サイガさんがお兄ちゃんだったらすごく嬉しいです  
!!」

キャラのテンションは結構なものだった。

しかし、そのテンションをある程度下げ、上目遣いでサイガの方を見る。

キャラ

「えっと “お兄ちゃん” って呼んでも いいですか ？」

そして、恐る恐る、改めてサイガに訊ねた。

別にサイガが恐かった訳では無いが、“もし断られたら”と考えると、そうなると思うと、少し恐くなったのだ。

しかし、サイガは基本的に優しい。

故に

サイガ

「ああ、俺で良ければそう呼んでくれ」

サイガは快く了承した。

その瞬間、キャラの表情が、パアツと明るくなった。

キャラ

「あ、ありがとうございます！ お兄ちゃん！！」

キャラは、サイガに満面の笑みで感謝した。

あまりにも嬉しかったのか、その眼には若干嬉し涙が見える。

さらに

エリオ

「あ、あの…！！」

キャラが歓喜する中、エリオが急に身を乗り出した。

エリオ

「僕も “兄さん” って呼んでいいでしょうか？」

エリオも又、サイガを兄と呼びたいらしい。

それを許可されたキャラが羨ましかったのか、少し興奮気味だった。

サイガ

「ああ、勿論だ」

サイガはエリオの願いも快く了承した。

エリオ

「ありがとうございます！ 兄さん！！」

エリオもキャロ同様満面の笑みでサイガに感謝する。

スバル

「いや、平和だねえ」

ティアナ

「そうね」

そんな3人の光景を見ていたスバルとティアナは、この上なく和んでいたと言っ。

フェイト

「はあ」

「

なのは

「どうしたの？ 溜息なんかついて

」

サイガがエリオとキャロの兄になってから2日後。

なのはとフェイトの部屋にて。

フェイトが突然、深い溜息をつき、心配したなのはが溜息の理由を訊ねた。

フェイト

「最近ね エリオとキャロが、サイガの事を“お兄ちゃん”って呼んで懐いてるんだ」

なのは  
「ふんふん」

フェイト  
「私にはあんまり甘えてくれなくなったから 何だか寂しいなあ  
つて」

なのは  
「そうなんだ」

フェイト  
「はあ」。私は2人のお姉さんに相応しくないのかな」

なのは  
「大丈夫だよ。そんな事無いって あれ？ お姉さん？ お母さんじゃなくて？」

フェイト  
「え？」

なのはが感じた言葉の違和感。

フェイトの年齢を考えれば、お母さんの方が不自然なのだが、エリ

オとキャラの保護者はフェイトと言う事になっている。

つまり、フェイトは2人の母親と言う事になる。

しかし、フェイトの口から出たのは“お姉さん”。

フェイト

「そう　だよね　。　何でお姉さんって言ったんだろ？」

フェイトはそんな疑問を口に出しているが、内心では別の疑問が浮かんでいた。

フェイト

「（何で　サイガの顔が浮かんだんだろ　）」

フェイトの心の中にはサイガがいた。

それが何故か、本人にはわからなかったが、後日、その思いに気づく時が来るのだった。

第8話 〱団樂〱 サイガとフォワード（後書き）

無理矢理がいつぱいな感じ（笑）

どうしよおー！ー！ー！

感想・指摘・要望・質問等お待ちしております。

ではまた

次回 〱光速〱 サイガ VS フェイト

第9話 く光速く サイガ vs フェイト(前書き)

なんかもおく、グダグダです。

先に言っときます。

すみませんm | | m

では、ごうござ

第9話 く光速く サイガ vs フェイト

【フェイトside】

最近、すごく悩んでいます。

っていつかのリインの入りと同じになっちゃったけど

悩んでるのは本当だし。

はああ。

私が何に悩んでるのかと言うと、1つはエリオとキャロ。

最近、あんまり甘えてくれなくなっちゃって、ちょっと寂しい。

でも、やっぱりいつまでもそう言う訳にいかないのかな？

って思ったりもしてる。

だからって訳じゃ無いけど、それでも、ある程度の吹っ切れてる。

私の最近の一番の悩み

それは

／／／

はっ！

いけない、いけない。

一瞬意識が飛んでた。

んんっ！

改めて

最近、サイガの事が気になって仕方ない。

朝も昼も夜も、仕事中も休憩中も、ご飯の時も寝る時も、ずっと気になってる。

こんな事になった事がないから、この気持ちは何なのかわからないけど

これって、もしかして

【3人称side】

フェイト

「はっ!?!」

現在、午前3時半頃。

まだ空が暗めの早朝（一般的には深夜？）。

フェイトは自室のベッドで眼を覚ました。

フェイト

「（なんだろう　。何か、結構語ってた気がする　）」

心の中で呟きながら、ふと隣をしてみる。

そこには、同室の親友・高町なのはがスヤスヤと寝息を立てていた。

フェイト

「（どうしよう　眼、覚めちゃったな　）」

フェイトの頭は完全に覚醒していた。

まだ仕事までかなり時間があるが、完全に眠気が飛んでいる。

フェイト

「（仕方ないな　。ちょっと散歩でもしよう　）」

フエイトは隣のベッドで寝ている親友を起こさないように、素早く着替えを済ませ、そっと部屋を後にした。

フエイト

「あんまり人いないな」

自室を後にしてから数十分後

大体午前4時過ぎ。

フエイトは何をするでもなく、ただ隊舎の中をひたすら散策していた。

特に新しい発見などがある訳でもなく、普通の、いつも通りの六課隊舎。

ただ時間帯が時間帯だけに、あまり出歩いている人はいない。

現に、フェイトが見掛けた、もしくは会った人は、今のところ2、3人。

残業らしき作業をこなすその数名を見掛けただけである。

フェイト

「何もする事が無いなあ」

フェイトはそんな事を考えていたが、全く以てその通りである。

全く以てその通りの思考を持ちながら、フェイトが隊舎の廊下を歩いていた時

ザッ

フェイト

「ん？」

隊舎の外の方から微かだが物音が聞こえた。

フェイト

「(こんな時間に誰だろう?)」

そんな事を考えるフェイト。

“それはお前も一緒だろう”、と言いつツツコミは無しで。

フェイトが傍の窓から外を覗いて見ると

サイガ

「ハッ！」

そこには、一心不乱に剣を振る、サイガの姿があった。

フェイト

「!!! / / /」

計らずもそんな光景を見掛けてしまったフェイト。

数十分前の夢(?)の件もあって、その顔が一瞬で紅潮する。

しかし

フェイト

「（これは　。この際だ　この気持ちは何なのか　確かめよう！）」

そう考えたフェイトは、外にいるサイガの許へと向かった。

サイガ

「ふう　後、大体100回くらいか　」

サイガはここ最近、ずっと剣の素振り続けている。

その回数、1日10000回。

そして、深夜2時辺りを過ぎた頃から始め、現在凡そ9900回。

一心不乱に振り続けているため、正確な回数は把握していない。

。 と言っか、正確に10000回も数える方が無理だ（作者的に）

が、凡そで出したその回数も、強ち間違いではないのである。

そこがサイガのすごい（？）所だ。

ちなみに、サイガはあまり汗をかいていない。

サイガにとってこの鍛錬は、あくまで体を鈍らせないためのものであるため、あまり汗をかかないのである。

そこも、サイガのすごい（？）所なのかも知れない。

サイガ

「さて、続けるか」

そして、そんなすごい(?)サイガが、再び素振りを始めようとした時

フェイト

「サイガ？」

サイガ

「ん？ フェイトか？」

そこへ、フェイトがやって来た。

サイガ

「どうしたんだ？ こんな時間に」

サイガは剣を持っていた鞘に収め、フェイトの方へ向き直る。

フェイト

「なんだか眼が覚めちゃって。サイガこそ、こんな時間に修行？」

サイガ

「ああ。と言っても、体が鈍らないよう、10000回程剣を振っているだけだな」

フェイト

「10000回程度って」

フェイトは若干呆れ気味に呟く。

サイガの事だ。

きっとそれを毎日やっているのだろう。

そう思ってこそその呟きであった。

サイガ

「それで？ フェイトはこの後どうするんだ？」

フェイト

「え？ どうするって」

サイガに訊ねられ、フェイトは考えた。

“モヤモヤした気持ちが何なのかを確かめたい”

それはそうなのだが、どうやって確かめる？

フェイトは考えた。

その方法を。

フェイトは思いついた。

その、方法を。

フェイトは口に出した。

その、方法を！

フェイト

「サイガ、私と模擬戦しない？」

ドオオオオオン！

フェイトの中で何かが弾けた音

フェイト

「（私何言ってるのおおおお！：！：！）」

読者も、作者も、本人さえもツツコミ出す急展開。

唐突な提案。

前触れも無い言葉。

しかし

サイガ

「ああ、いいぞ」

あっさりと了承されてしまった。

サイガ

「だが、こんな時間に訓練場が使えるのか？」

フェイト

「う、うん、大丈夫。　（はぁあ　　ホント、何で模擬戦なんて  
）」

そう言いながらも、フェイトは若干の後悔の念を抱いていた。

だが

フェイト

「（でも、確かにサイガとは戦ってみたかったし　　もしかしたら、  
何かわかるかも知れないし　　）」

そう考えると、模擬戦などと言い出したのも強ち失敗ではない感じ  
に思えた。

フェイト

「それじゃあ、行こっか」

サイガ

「ああ」

2人は模擬戦をするため、訓練場へと向かった。

## 六課 訓練場

サイガ

「本当に使っても平気なのか？」

フェイト

「うん。後ではやてには私から言うておくから」

訓練場にやって来たサイガとフェイト。

特に深い意味を持たない会話を交わし、せっせと模擬戦の準備を始

める。

サイガは着物を戦闘装束に変化させ、刀を抜く。

フェイトは相棒であるインテリジェントデバイス『バルディッシュ・アサルト』を起動させ、軍服調である『インパルスフォーム』のバリアジャケットを纏う。

フェイト

「準備はいい？」

サイガ

「ああ、いつでも」

2人は対峙する。

そのまま数秒間の沈黙。

訓練場を支配する静寂。

そして

フェイト

「それじゃあ 行くよ!!」

サイガ

「来い!!」

2人が動く。

フェイト

「はあああ!!!!」

サイガ

「はあっ!!!!」

ガキイイイイン!!!!

金属同士がぶつかり合ったような音が鳴り響く。

フェイトはバルディッシュを雷の刃がついた鎌型の『ハーケンフォーム』に変形させ、サイガは刀を七支刀に変化させて打ち合っている。

フェイト

「いきなり七支刀使ってくれるんだ。ちょっと嬉しいかな」

サイガ

「お前が相手なら仕方ないから　なっ!!」

フェイト

「っ!!!!」

自身の剣と鏢迫り合いを演じていたフェイトの鎌を押し退け、サイガは剣に雷を纏わせる。

サイガ

「はあああ!!!!」

フェイト

「くっ!!」

ギイイン!!!!

フェイトは咄嗟にプロテクションを展開し、サイガの斬撃を防ぐ。

防いだ後、すぐにサイガと距離を取る。

同時にサイガもフェイトから距離を取ったため、両者の間にはかなりの空間が存在する。

その空間を挟み、両者は魔力を技に籠める。

フェイト

「ハーケンセイバー！！！」

サイガ

「七天伐刀！！！」

ドカアアアアン！！！！

フェイトが撃ち出した金色の魔力刃。

サイガが撃ち出した蒼雷の斬撃。

中距離攻撃である2つの技がぶつかり合い、爆発が起こる。

爆発によって発生した煙が、両者を遮

フェイト

「プラスマスマッシュャー！！！」

サイガ

「っ！！？」

っていたが、フェイトが放った雷の砲撃が煙を蹴散らし、サイガを襲う。

サイガ

「くっ！！！」

サイガは咄嗟にその砲撃を躲すが、その瞬間

フェイト

「はああああ！！！！！」

サイガ

「なっ！！？」

フェイトがサイガの目の前まで一瞬で迫り、鎌の魔力刃で斬り掛かった。

ガキイイイイン!!!

フェイト

「!!!」

サイガ

「ぐっ!!!」

サイガは又も咄嗟に七支刀を眼前に翳し、フェイトの魔力刃を受け止める。

攻撃を受け止められたフェイトは一瞬驚くが、すぐにフツと笑みを浮かべ

シュンッ!

サイガ

「!!!」

フェイト

「はああっ!!」

又も一瞬でサイガの背後に廻り込み、再び魔力刃で斬り掛かる。

サイガは頭ではその斬撃を躲そうとしていた。

が、剣に受けていた手応えがいきなり無くなり、前のめりに蹠  
跟けてしまっているため、回避が間に合わない。

サイガ

「っ!!!!!!」

それでもサイガは回避を試みる。

その結果

シューイイイイイン!!!!

フェイト

「!?!」

サイガ

「ハア　危なかったな　」

回避は成功した。

ダメージの回避は　。

その証拠に、サイガの体には傷がついていないが、サイガの着物が少し裂けている。

サイガは裂けている部分を一瞥し、徐にその部分に触れる。

そして、一瞬魔力を籠め、手を退けると、着物の傷が修復されていた。

フェイト

「へえ　そんなに簡単に直せるんだ　」

サイガ

「ああ。この程度なら極少量の魔力で事足りる　」

サイガはそう言うが、サイガ程の技術があれば、かなりの損傷であっても、あまり魔力を掛けずに修復が可能であったりする。

サイガ

「それにしても かなり迅いな」

それはさて置き、サイガはフェイトのスピードに驚いている。

フェイト

「これでも“六課一”って言われてるからね」

フェイトの機動力は六課一と言われている。

しかし、フェイトはそれを過信したり、誇示するような性格ではない。

とは言え、その速さに自信は持っているようだ。

だが

サイガ

「そうか　だが、残念だな　」

フェイト

「??？」

サイガの言葉の意味をフェイトは理解できず、軽く首を傾げる。

サイガ

「今日からは　“六課二”だ　」

フェイト

「むう　」

今度はサイガの言葉の意味をしっかりと理解できたフェイト。

その言葉に少しムツとし、デバイスを構える。

フェイト

「ならやってみる？　どっちが迅いか　」

サイガ

「フツ　　いいぞ　」

サイガも剣を構え、フェイトの誘いに乗る。

そして

フェイト

「!!!」

先に動いたのはフェイトだった。

スピード戦の定石通り、一瞬でサイガの背後に廻り込んだ

サイガ

「どこを見てるんだ？」

フェイト

「っ!!!?」

筈だった。

しかし、背後に廻り込んだ筈が、眼の前にサイガの背は無く、それ

どころか自分が背後に廻り込まれた。

フェイトは驚愕しながらも、サイガの方を向き直り、距離を取る。

フェイト

「くっ！ トライデント つ！！！！！」

そして、離れた位置から再び砲撃を放とうとした時、魔法の発動を止めてしまった。

自身の喉元に、剣の鋒が突きつけられていたから。

サイガ

「フッ」

サイガは不敵な笑みを浮かべる。

フェイト

「（う、嘘）」

対するフェイトはと言うと、サイガの動きに反応できなかった事に驚愕していた。

サイガ

「どっつするっ？」

フェイト

「くっ！！！」

サイガの問い掛けの答えと言わんばかりに、フェイトは喉元に突きつけられていた剣を弾き、再び超スピードでサイガから距離を取ると、デバイスを構えたままジッとサイガを見つめる。

その面持ちは冷静だが、内心はそれに反していた。

フェイト

「（どうする！？ 真ソニックじゃないと、サイガの機動力には敵わない。 だったら！）」

自分とサイガの機動力を比べ、今の状態じゃ敵わないと悟ったフェイトは、作戦を変更する。

フェイト

「プラズマランサー！！！！！」

フェイトは無数の魔力弾を生成し、サイガに向けて一斉に放った。

しかし、サイガはそれを次々と躲していく。

フェイト

「プラズマバレット!!!」

フェイトは新たな魔力弾を放つ。

放たれた魔力弾は、今度は上下左右、四方八方、全方位からサイガを狙う。

フェイトの考えた作戦。

それは

フェイト

「（魔力弾で動きを牽制して、速攻で決める!）」

と言っものだった。

幾ら機動力が高くて、障害物が多ければ幾分低下する。

それを狙ったものだった。

そして、フェイトの予想通り、サイガの機動力が落ち始めた。

魔力弾を躲し切ってはいるが、動きにキレが無くなって来ている。

フェイト

「（今だ！）」

フェイトはここぞと思い、デバイスを構え、魔力弾に包囲されたサイガへと特攻する。

フェイト

「はああああ……！」

フェイトは魔力刃を振り翳し、サイガに斬り掛かった。

しかし

フェイト

「っ!!!?」

フェイトの斬撃は、サイガではなく、空を斬った。

その直後、首元に一瞬衝撃が走り、「終わりだ」と言っ眩きを聞きながら、フェイトは気を失った。

【フェイトside】

フェイト

「う、ううん」

サイガ

「ん? 起きたか?」

私はサイガにそう訊ねられた。

どうやら模擬戦は、私の気絶

フェイト

「私の 負け、だね」

つまり私の負けで終わったらしい。

サイガ

「そう落ち込むな。俺もかなりギリギリだった」

サイガはそう言うけど、顔はとても涼しげ。

とてもじゃ無いけど、“ギリギリ”とは思えないな。

そんな事を考えている内に、だんだん頭がハッキリとして来た。

そして、ある事に気付いた。

サイガの顔が、私の真上にある事を。

そして、さらに気付いた。

私が サイガに膝枕をしてもらっている事を。

フェイト

「~~~~つ!!!? / / /」

サイガ

「お、おい! まだ動くな」

私は慌てて体を起こそうとしたけど、サイガがそれをよしとせず、軽く押さえる感じで体を掴まれる。

フェイト

「で、でも / / /」

サイガ

「大丈夫だ。俺は気にしないから もう少し寝てる」

フェイト  
「ううう  
／／／」

“私が気にするよ”って言いたかった。

けど、サイガが私に向けた微笑みが、その言葉を喉の奥に押し込んだ。

私は、もの見事に丸め込まれてしまった。

それから数十分間、私はサイガに膝枕をしてもらっていた。

ちょっと　　と言うよりはかなり恥ずかしかった。

けど、漸く、何かがわかった気がした。

それからさらに数時間後。

私は、部隊長室にいた。

私の他には、部屋の主であるはやてが、自分の椅子に座っている。

フェイト

「ねえ、はやて」

はやて

「ん？ 何や？ フェイトちゃん？」

私は勇気を出して、訊ねた。

フェイト

「はやてってさ サイガの事、好きだよね？」

私の問いかけを受けたはやては、少し真剣な面持ちになった。

その数秒後、はやては口を開いた。

はやて

「うん そうや 。けど、それはフェイトちゃんもやる?」

フェイト

「う、うん / / /」

はやての切り替えしに、私の顔が熱を持っていくのがわかる。

そんな私を見ながら、はやては続けた。

はやて

「それに リンも、多分シグナムもそうやるな 「

フェイト

「うん / / /」

それはわたしもそうだと思う。

リンはすごくサイガにアプローチを掛けてるし、シグナムも模擬戦の時の様子からすると。

はやて  
「それにあの顔であの性格やかなあ。まだまだ倍率は上がるかもな」

それも同意見だった。

サイガみたいな男の人って、そうはいないと思う。

はやて

「けど、どんなに倍率がってもな」

はやては椅子からスッと立ち上がり、私の方を見て

はやて

「負ける気は無いで？ / / /」

笑顔で一言。

そして、私も

フェイト

「私だって、負けないよ！ / / /」

はめて  
ライバルに言った。

そう

私だって、絶対負けない

私は、サイガの事が好きだから。

T  
o  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

第9話 く光速く サイガ vs フェイト（後書き）

どうでしたか？

g d g d でしたか？

サイガの強さがわからなくなってきた

一応言っとくと

魔力量：はやて<<サイガ

機動力：フェイト<サイガ

攻撃力：なのは<サイガ

ってイメージです。

感想・指摘・要望・質問等、お待ちしております。

ではまた

次回、  
　　〽廻転〽  
運命の齒車

第10話 く廻転く 運命の歯車(前書き)

大した展開はありません。

では、どうぞ

第10話 く廻転く 運命の齒車

【3人称side】

とある暗い空間。

そこはまるで世界と世界の狭間

というよりは四次元と言った方が正しいか。

ともあれ、そのように、上も下も右も左もあったものではない。

まさに無の空間。

いや、正確には、何も無いと言う訳ではない。

その空間には人影が1つと、巨大な黒い塊が1つ存在する。

???

「何の用だ」

1つの影が不意にそう訊ねた。

すると、その影と黒い塊以外にもう1つ、別の人影が空間内に現れた。

???

「どうやら、次元神の遣いが来たようだ。あの“光龍王”がな。  
。しかも、機動六課と協力関係にあるらしい」

突然現れた影はそう答える。

声色からして、2つの影はどちらも男のようだ。

???

「そうか。ヤツはどうした？」

???

「ヤツ？ ああ、アンリミテッド・デザイア“無限の欲望”か。そろそろ動く頃じゃないか？ この際、相撃ってくれれば楽なんだが」

???

「まあ、ヤツが“光龍王”に敵うとは思えんがな」

そう言った後、男は黒い塊に視線を移す。

黒い塊は、まるで心臓のように律動的な鼓動を繰り返し、その度にドクッ、ドクッと言う音が空間に響く。

「???

」どちらにせよ、邪魔はさせん。 “魔王” は必ず甦らせる」

## 六課 隊舎

サイガ

「ふう  
」

サイガは1人、自室で静かに座禅を組んで瞑想をしていた。

何もやる事が無く、暇な時、サイガはいつもこうしている。

そして、今日もそれに勤しみ、かれこれ30分くらいは経っているだろうか。

その時

コン！ コン！

ライン

「サイガさくん、いますかあ？」

不意に扉がノックされ、ラインの声がした。

サイガ

「ああ、いるぞ」

サイガは応答をすると同時に、扉を開ける。

サイガ

「何か用か？」

サイガはリインがわざわざ自分の部屋に来た理由を訊ねる。

リイン

「はやてちゃんが呼んでるのです」

“お仕事の時間ですよ”と軽く付け足し、サイガの問いに答えるリイン。

サイガ

「わかった。今行く」

そんなリインの仕草に和んだのか、サイガはクスツと笑みを零しながら、すぐに装いを整え、リインに付いて行く。

はやての許へと向かう道中、同じくはやてに召集を掛けられたフェイト、シグナムの2人と合流してしまった。

何故“してしまった”なのか

それは、サイガに好意を寄せる3人が、その本人と一緒に歩いてい

るため、なんとなく空気が重いのである。

シグナムは慣れない事態に顔を赤らめ、半歩下がって歩いている。

後の2人 フェイトとリインは互いにライバルであると気付いているため、時偶眼を合わせては、その度に火花を散らしている（感じがする）。

しかし、当の本人はそれに気付く事は疎か、気にする素振りさえも無かった。

そんな状態のまま、4人ははやてが待つ部隊長室へと向かった。

部隊長室では、はやてが1人、召集を掛けたメンバーが集まるのを、椅子に腰掛けて待っていた。

その召集を掛けたメンバーの内、自分の恋のライバル達が、その意中の人物とおかしな事になっているとは知らずに。

そんなはやての目の前のデスクには、何やら書類のようなものが置かれている。

はやてはそれを手にして

はやて

「オークションに“ロストログア”あり 　か 　」

と、小さく呟いた。

はやてが手にしている書類には

“ホテル・アグスタのオークションにロストログアあり”

と書かれている。

はやてが再び書類をデスクの上に置いた時

リイン

「はやてちゃん、みんなを連れて来ましたあ」

部隊長室のドアが開き、先程の4人と、部屋の前で会ったのはとウィータを合わせた計6人が入ってきた。

はやて

「うん。ありがとな、リイン」

はやてはリインにお礼を言う。

サイガ

「それで？ またガジェットが現れたのか？」

サイガは召集の理由をはやてに訊ねる。

はやて

「ううん　今回はガジェットやのうて、警備のお仕事や」

フェイト

「警備？」

はやて

「うん。ホテル・アグスタで行われるオークションの警備や」

はやては一同に任務の内容を説明する。

この時誰も、知る由も無かつただろう。

この任務を皮切りに、物語の歯車が急速に廻転を始める事を。

T o B e C o n t i n u e d

第10話 〱廻転〱 運命の齒車（後書き）

感想・指摘・要望・質問等、お待ちしております。

ではまた

次回、 〱警備〱 ホテル・アグスタ

第11話 ㄱ警備ㄱ ホテル・アグスタ(前書き)

タイトル通り、今回から本編です。

では、どうぞ

第11話 ㄱ警備ㄱ ホテル・アグスタ

【3人称side】

現在、六課の主要メンバーを乗せたヘリが、目的地であるホテル・アグスタへ向かって飛行していた。

勿論、サイガもその1人である。

そのヘリの中で、はやてが任務の説明をしていたが、その際に発せられた言葉の中に、“レリック”や“ロストログア”と言う単語が含まれていた。

本来ならば、サイガがその単語の意味を知る筈が無い。

何故か？

それは異世界の単語だからである。

しかし、サイガがその単語の意味を訊ねる事は無かった。

これまた何故か？

サイガは頭が良いからである。

部族王や皇帝であった事や、そもそも勉強などを好んでいた事もあり、サイガはすごぶる頭が良い。

そのため、異世界の言葉や単語などは、既に、完全に覚え切っているのだ。

と、そんなこんなの説明の内に、サイガ達を乗せたへりは、目的地であるホテル・アグスタへと到着した。

サイガ

「へりの中の描写は要らなかつたのか？」

いいんです。

ホテル・アグスタ 地下駐車場

ホテルの地下駐車場 。

そこには今、サイガとシャマルがいる。

ちなみに、サイガはなのは、フェイト、はやてと共にホテル内部で、シャマルはその他のメンバーと共にホテル周辺での警備行う予定である。

そんな持ち場が違う2人が何故一緒にいるのか？

それは

シャマル

「ハイ、サイガさんの仕事着」

そう言ってシャマルは1つのケースをサイガに渡す。

サイガ  
「仕事着？」

シヤマル

「そ 今回のオークションには地位の高い人達が来てるから、ちゃんとした格好じゃないといけないのよ」

そう言われ、サイガがケースを少し開き、中を覗き見る。

そこには、サイガがあまり着慣れない と言つかほとんど全く来た事の無い服が入っていた。

サイガ

「 普段の着物ではダメなのか？」

シヤマル

「うーん、まあ確かにそれも正装って言えば正装だけど 。 それだとちょっと目立つかな？って 」

サイガ

「確かにそうかも知れんが 」

シヤマル

「だから、今回はこの服でお仕事してね。あ！それから　これ、サイガさんの身分証明書。これ失くすと色々大変な事になるから、落とさないでね」

サイガ

「ハア

わかった

」

最終的にサイガは了承し、シヤマルから身分証明書を受け取る。

サイガ

「それじゃあ、外の方は任せたぞ」

シヤマル

「うん、そっちも頑張ってね」

そう言った後、2人は別れて、それぞれの持ち場へと向かった。

ホテル・アグスタ ロビー

なのは

「サイガさん、どんな格好で来るんだろうね？」

フェイト

「う、うん / / /」

はやて

「そやね / / /」

現在、ホテルのロビーにて、それぞれ色の違うドレスを身に纏ったなのは、フェイト、はやての3人は、サイガを待っていた。

のだが、心なしかフェイトとはやての顔が赤い。

なのは

「？ どうしたの？ 2人共 /」

それに気付いたなのはが訊ねる。

その問い掛けに対する2人の答えは

フェイト・はやて

「「にゃ、にゃんでもにゃい!!」 / / / 「」

なのは

「（にゃ??.）」

まあ、なのはがそう思うのも無理はないだろう。

2人の気持ちを知らないから。

そんな2人の胸中と言うと

フェイト

「（わ、私の格好 変じゃ、ないかな / / / 「」

はやて

「（ううう アカン、考えれば考える程、なんや恥ずかしなってきた / / / 「」

つてな具合に軽くヒートアップしていた。

そんな モヤモヤって言うのかな？ この場合 。

それを抱えつつ、時偶傍にある姿見で服装をチェックしている。

その時

なのは

「あ！ サイガさん！」

フェイト・はやて

「！！！！！！？ // //」

どうやらサイガが来たらしく、なのはが声を掛ける。

なのはの言葉を聞いた2人は、意表を突かれたように体をビクッと硬直させる。

そして、2人が振り向くと

サイガ

「遅くなってすまない。あまり慣れない服装だったのでな  
少々手間取ってしまった。」

その眼に、慣れないながらも黒いスーツを見事に着こなしているサイガが映った。

その瞬間、2人は思った

フェイト・はやて

「カ、カッコいい / / /」

と。

いつかもそうだったが、素材が良ければ何を着てようが基本的にはカッコいいのである。

そんな“カッコいい”サイガに、2人は見蕩れていた。

そして、その視線にサイガが気付いた。

サイガ

「ん？ どうした？ 何かおかしいか？」

サイガは別に心配性と言う訳では無いのだが、何分、全く以て着慣れない服だ。

それ故

“着方が間違っているのか？”

と、2人の視線をそう言う風に受け取ったの問い掛けだった。

はやて

「いー！！ いや、そんな事あれへんよ！！ なあ、フェイトちゃん  
！！ / / /」

フェイト

「う、うん！！ そうだよ！！ すっごく似合ってるよ！！ /  
/ /」

その問い掛けに対し、2人は必死で否定し、肯定した。

サイガ

「そうか、ありがとう。2人もとても似合っているぞ。」

フェイト・はやて

「！！！！！！！！ / / / /」

サイガも又、2人のドレス姿を褒めた。

勿論、2人の顔は一気に紅潮しましたが、何か？

まあ、それはそれとして

フェイト・はやて

「あ、あり がと / / /」

2人はなんとか正気を保ち、声をシンクロさせながら言った。

なのは

「ねえサイガさん。私はどうかな？」

なのはも何か評価が欲しいのか、その場でクルッと一回転し、ドレスをサイガに見せる。

サイガ

「ああ。勿論、なのはも似合っているぞ」

なのは

「にはははは、ありがとう / / /」

なのはの顔も少し赤かったが、それは嬉しさから来るものであって、別に意識している訳ではなかった。

まだこの時は。

【ティアナside】

ホテル・アグスタ周辺

ティアナ

《ねえスバル》

スバル

《ん？ 何？ ティア》

ティアナ

《アンタって八神部隊長とか副隊長達の事 結構詳しいわよね？》

スバル

《うーん、父さんやギン姉から聞いた事くらいだけど、八神部隊長が使ってるデバイスが魔導書型で、その名前が『夜天の書』って言う事。副隊長達とシヤマル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有してる特別戦力だった事。で、それにリイン曹長を合わせて6人揃えば“無敵の戦力”って事。まあ、八神部隊長達の詳しい出自とか能力の詳細は特秘事項だから、私もそれ以上は知らないけど》

ティアナ

《レアスキル持ちの人はみんなそうよね》

スバル

《ティア、何か気になるの？》

ティアナ

《別に》

スバル

《そう。じゃあ、また後でね》

ティアナ

《うん》

その言葉を最後に、私はスバルとの念話を切った。

そして、私は改めて機動六課の戦力について考える。

スバル

『6人揃えば“無敵の戦力”って事』

“無敵”？

六課の戦力は“無敵”を通り越して明らかに“異常”だ。

八神部隊長がどんな裏技を使ったのかわからないけど、隊長格全員がオーバース、副隊長達でさえニアSランク。

他のメンバーだって、前線から管制官まで、全員が未来のエリート達ばかり。

あの歳でもうBランクを取ってるエリオと、稀少で強力な竜召喚士のキャロの2人は、フェイト隊長の秘蔵っ子。

危なっかしくはあっても、潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル。

ティアナ

「それに」

特に“異常”なのは、やっぱりサイガさんだ。

次元漂流者で、元の世界では王様で。

あのシグナム副隊長に模擬戦で勝って、さらにはフェイト隊長との模擬戦でも勝ったって聞いた。

しかも、どっちも本気ではなかったらしい。

ハッキリ言っただけがわからない。

でも、結局言える事は、なんの取柄も無いのは私だけって事。

けど、そんなの関係無い！！

ティアナ

「証明するんだ　ランスターの弾丸の力を、兄さんの力を！！」

そう呟きながら、私はクロスミラージユを握り締めた。

ホテル・アグスタ内部

ホテル内の4人は、現在、2組に別れてお仕事中である。

まずは1組目のサイガ・なのは組の様子。

サイガ

「しかし、随分人がいるんだな。オークションまではまだ時間があるんだろう?」

なのは

「うん。大体、後3時間くらいかな?」

サイガ

「このまま何も無ければいいんだが」

なのは

「そうだね」

こんな感じ。

まあ、特に何も無い。

しかし、“全く無い”と言う訳でもない。

それは、なのはの胸中であつた。

なのは

「(さっきのフェイトちゃんとはやてちゃんの様子って  
。もし  
かして2人って、サイガさんの事が好きなのかな?)」

何気なく気付いた事実。

まあ、あの様子だと普通気付くと思うけど  
。

なのは

「(確かに サイガさんって、カッコいいよね  
)」

なのはも又、サイガの事を“カッコいい”と思っていた。

しかし、ただそれだけであつた。

なのは

「(ううう)

「この場合、どっちを応援したらいいんだろう」

「

なのはは友達として、どちらの恋を応援すればいいのか戸惑っていた。

まだこの時は。

次に2組目、フェイト・はやての様子。

フェイト・はやて

「ハア〜」

「」

2人はいきなり、とても深い溜息をついた。

そして、思っていた。

フェイト・はやて

「（なんであそこでゲーを）」

この組み合わせ。

何で決めたかと言うと、世間一般で“グーパー”と言われるジャンケンである。

そして

サイガとなのは パー

フェイトとはやて グー

と言う結果になった訳だ。

その結果を、2人は猛烈に後悔しているのである。

フェイト

「はやて　もし、なのはまでサイガの事を」

はやて

「だ、大丈夫や！　多分」

2人の話題は、さっきからこればかり。

フェイト・はやて

「ハア〜」

そして再び深い溜息をつき

フェイト・はやて

「（なんであそこでゲーを）」

場面はループする。

と言つかお2人さん。

お仕事中ですよ？

「このシッロミはこの時のためにあるのである。」

ホテル・アグスタ周辺の森林

ホテル・アグスタから数百メートル離れた薄暗い森林の中。

そこに、フードを被った人物と、紫色の髪の少女がいた。

???

「あそこか？」

???

「うん」

フードを被った人物は、声からしてどつやら男のようだ。

その男が少女に問い掛け、少女が静かに答える。

その時、1匹の小さな虫が少女の指に止まり、何かを訴えるように体を動かす。

その動きから、少女は虫の意思を読み解き

?????

「ドクターの玩具が近付いて来てるって」

と、小さく呟いた。

キュイイイイイン!!!!

シャマル

「っ!!!?!」

ホテルの屋上にて警備を行っていたシャマル。

そのシャマルが持つ指輪型のデバイス『クラールヴィント』に異変が起こった。

シャマル

「クラールヴィントに反応あり! シャーリー!」

シャマルはすぐにロングアーチの回線とクラールヴィントのデータを繋ぎ、敵の情報の解析を指示する。

そして、解析の結果、ホテル周辺に数十機のガジェットが出現した事が判明した。

シャマル

「前線各員へ！ 状況は広域防御戦です！ ロングアーチ1の総合回線と合わせて、私、シャマルが現場指揮を行います！」

ALL

「了解！！！！」

シャマルの現場指揮の下、フォワードの4人はホテル前に防衛ラインを設置し、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ（狼形態）の2人と1匹は、ガジエットの討伐へと繰り出した。

ヴィータ

「新人共の防衛ラインまで1機たりとも通さねえ！ 速攻でブツ潰す！！」

シグナム

「フツ お前も案外過保護だな」

ヴィータ

「うるせえよ！　そう言うお前はどつなんだ！？」

シグナム

「無論、同じだ。最近、何故か妙にウズウズしているのでは。  
他の奴らに渡すものか！！」

シグナムとヴィータはデバイスを携えて空を翔け、ザフィーラは地を駆け、勢いよくガジェットの群れへと飛び込んでいく。

T o B e C o n t i n u e d

第11話 〱 警備 〱 ホテル・アグスタ（後書き）

感想・指摘・要望・質問等、お待ちしております。

ではまた

次回、 〱 過失 〱 少女の焦り

第12話 く過失く 少女の焦り(前書き)

どうかで見た事があるような文面です。

三 (一) 三

では、さうぞう

## 第12話 過失 少女の焦り

【3人称side】

ホテル・アグスタ周辺に大量のガジェットが出現し、外で警備をしていたシグナム・ヴィータ・ザフィーラなどのメンバーを中心に広域防御戦が開始される。

ガジェットの群れへと飛び込んで行った2人と1匹は、物凄い勢いでガジェットを破壊し、その数を徐々に、確実に減らしていく。

その戦闘を見ていたフォワードら新人魔導師達の心には、様々な感情が生じていた。

エリオ・キャロ

「「す、すごい」」

スバル

「さっすが副隊長!!」

それは“感心”であり、“驚嘆”であり、“尊敬”であった。

しかし

ティアナ

「

」

それはただ1人を除いてのもの。

ティアナ

「これで

能力リミッター付き

」

“焦燥”

他とは違うその感情こそが、ティアナ・ランスターの心を支配した  
ものだった。

前々からティアナは、眼の前で戦っている者達と自分に力量の差を  
感じていた。

そんな劣等感が眼の前の戦況を受けて一気に膨れ上がり、焦燥とな  
ってティアナを襲う。

ティアナ

「っ  
！！」

焦燥に襲われるティアナの手は、無意識に強く握られていた。

#### ホテル・アグスタ内部

外でのガジェットとの戦闘は、内部を警備していた4人にも伝わっていた。

サイガ

「なのは！ 俺はアイツらの援護に出る！ お前ははやて達と合流して、客を避難させてくれ！！」

なのは

「わかった！ 気をつけてね！」

サイガの指示を受けたなのは、他の場所を警備している親友2人の許へと向かう。

サイガ

「（俺も急ぐか　　！！）」

サイガもフォワードの援護のため、戦闘装束の着物に着替え、ホテルの外へと向かう。

その表情は何故か険しい。

サイガはフォワード達の実力を知っている。

シグナムやヴィータ達の実力も知っている。

勿論、ガジェットなどに負ける事は無いと思っている。

しかし、その表情は険しい　　。

それは

サイガ

「（この胸騒ぎは一体）」

胸中に渦巻くの異様な騒めきから来るものだった。

その騒めきを抱いたまま、サイガはホテルの外へと駆ける。

ホテル・アグスタ周辺の森

ブウン

森の中から、機動六課とガジェットの戦闘を傍観しているローブの男と少女。

その2人の前に空間モニターが現れた。

???

《ごきげんよう。騎士ゼスト、ルーテシア》

モニターには1人の男が映っている。

男はこのガジェット関連の事件を起こしている張本人である次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティだった。

ルーテシア

「ごきげんよう」

ゼスト

「何の用だ」

ルーテシアと呼ばれる少女は無表情なまま返事をするが、ゼストと呼ばれる男はあからさまに嫌な顔をする。

その声にも同じ感情が籠もっている。

スカリエッティ

《冷たいね。近くで状況を見ているんだろう？ あのホテルに“レリック”は無さそうだが、実験材料としては興味深い骨董があるんだ。少し協力してはくれないか？ 君達なら実に造作も無いと思うが》

スカリエッティは2人に協力を依頼する。

しかし

ゼスト

「断る。 “レリック”が絡まぬ限り、互いに不可侵を守ると決めたはずだ」

ゼストがそれを拒否する。

スカリエッティ

《 ルーテシアはどうだい？ 頼まれてくれないか？ 》

ルーテシア

「 いいよ」

ゼストと違い、ルーテシアはスカリエッティの依頼を引き受ける。

スカリエッティ

《優しいなあ ありがとう》

ゼスト

「  
」

ゼストは正直苛立っていた。

目の前のモニターに映る男の飄々とした態度に 。

しかし、それを言葉にはしない。

スカリエッティ

《君のデバイス 『アスクレピオス』 に私の欲する物のデータを  
送っておいた》

スカリエッティは、ルーテシアが両の手に嵌めている紫色の宝玉が  
ついたグローブを一瞥し、再び彼女の顔へと視線を移す。

ルーテシア

「うん 。 じゃあ、ごきげんよう ドクター」

スカリエッティ

《ああ、ごきげんよう。吉報を待っているよ》

ピッツ！

その言葉を最後に、モニターが消える。

ゼスト

「いいのか？」

ルーテシア

「うん。ゼストやアギトはドクターを嫌うけど 私はドクターの事、そんなに嫌いじゃないから」

ゼスト

「そうか」

そんな会話を経て、2人はスカリエッティの依頼を実行に移す。

ホテルの周辺にて、ガジェットとの交戦が続く。

そんな最中、戦況に変化が訪れた。

途端にガジェットの動作が良くなり、さらにその数が増えたのだ。

それを受けたティアナは、スバル・エリオ・キャロに指示を出し、ガジェットの迎撃に出る。

先ず、スバルとエリオの2人が先陣を切り、それぞれのデバイス『リボルバーナックル』と『ストラーダ』でガジェットを破壊して行く。

ティアナとキャロもそれぞれの力で2人を援護しながら戦っていた。

しかし

ティアナ

「（くっ！！ このままじゃ埒が明かない だったらー！！）」

そう考えたティアナが、ここで思い切った行動を起こす。

シャマル

《ちょ！ ティアナ、大丈夫！？ 無茶しないで！ もうすぐヴィー  
ーたちちゃんがそっちに着くから！》

その行動に対してシャマルから制止が掛かる。

ティアナ

「大丈夫です！ 毎日朝晩練習してましたから！ エリオ、センタ  
ーまで下がって！」

エリオ

「えっ！？」

ティアナ

「私とスバルの2トップで行く！！」

エリオ

「あ、はい！！」

シヤマルの制止を振り切ったティアナは、エリオを下がらせて前に出る。

ティアナ

「スバル！ クロスシフトA 行くわよ！」

スバル

「オツケー!!!」

ティアナが作戦名を指示すると、スバルがそれに呼応する。

スバル

「いづくぞオオオ!!!」

スバルは自身が持つ先天性の魔法 『ウイングロード』を発動し、その上を縦横無尽に走り回ってガジェット達の注意を引く。

作戦内でのスバルの役は、所謂囮役のようだ。

そして、スバルがガジェット達を攪乱しているその隙に、ティアナが両手のクロスミラージュのハンマーを2つずつ 計4発のカー

トリツジをロードし、大量の魔力弾を生成する。

ティアナ

「（証明するんだ。特別な才能やすごい魔力が無かったって一流の隊長達がいる部隊でだって。どんな危険な戦いだって。私はランスターの弾丸はちゃんと敵を撃ち抜けるんだって！！！！）」

シヤマル

《ティアナ！？ 4発ロードなんて無茶よ！ それじゃあティアナもクロスミラージユも》

ティアナ

「撃てます！！！！」

そう言つてティアナは、その両手に握られた白き双銃を構える。

そして

ティアナ

「クロスファイヤー」

生成した魔力弾を一気に撃ち出す。

ティアナ

「シューーーーーー！ト！！！！！！！！」

ダダダダダアアアアン！！！！

ティアナが撃ち出した魔力弾は、次々とガジェットを破壊していく。

作戦は成功したかに見えた。

しかし

スバル

「えっ！？」

ティアナ

「っ！！！！？」

事態が急変した。

1発の魔力弾の軌道が逸れ、ガジェットではなく、スバルへと向か

う。

スバル

「あ  
」

これに対し、スバルの思考が停止した。

“ 当たる ”

“ 避けられない ”

誰もが 撃ち出した本人もがそう思った。

ティアナ

「ス スバルーーーーッ!!!!!!!!!!」

ティアナの悲痛な叫びが訝する。

ヴィータ

「スバル!!」

エリオ・キャロ

「「スバルさん!!!!!!」」

駆けつけたヴィータ、後方でその光景を見ていたエリオ・キャロの  
2人も同じく。

スバル

「っ!!!!!!」

スバルは思わずギョツと眼を瞑る。

そして、魔力弾がスバルに当たる

????

「我龍天聖!!!!!!」

ゴオオオオオツ!!!!!!

事は無かった。

スバルに迫っていた魔力弾を、下から現れた龍が呑み込んだ。

その龍を放ったのは

????

「大丈夫か!？」

スバル

「サイガさん？」

ホテル内部の警備を外れ、フォワード達の援護にやって来たサイガだった。

ヴィータ

「サイガ!? なんでココに!？」

サイガ

「少し胸騒ぎがしたんでな。内部をなのは達に任せて、お前達の援護に来たんだ」

ヴィータ

「そうか、取りあえず助かった。ありがとな」

教え子を救ってもらい、ヴィータはサイガに礼を言う。

スバル

「……！！ あ、ありがとうございます……！」

それを受け、助けてもらった本人も頭を下げる。

ヴィータ

「それより ティアナ……！！！」

ティアナ

「……！！？」

先程とは一変、ヴィータの表情が険しくなり、声にも怒りが籠もる。

ヴィータ

「このバカ……！ 無茶やった上に味方撃つてどうすんだ……！！！」

成功する いや、成功させると誓っていたティアナに、ヴィータの叱咤が重く押し掛かる。

スバル

「あの、ヴィータ副隊長 今のも、その コンビネーションの

1つで  
「

スバルがティアナのフォローに入る。

しかし

ヴィータ

「ふざけるタコ！！ 仲間を撃つってコンビネーションがあんのかよ！！ それに今のは直撃コースだ！！」

仲間を危険に晒すコンビネーションがある訳もなく、ヴィータの叱咤がスバルにも飛ぶ。

スバル

「違うんです！ 今のは私が  
「

ヴィータ

「うるせえバカ共！！ もういい！！ 後はアタシが  
！！」

ヴィータが2人を下がらせようとした時、1機のガジェットがレーザーを放った。

ヴィータ  
「しまっ

！！」

反応が遅れたヴィータが防御を試みるが、間に合わない。

その時

サイガ

「七天伐刀！！！」

ドカアアアアン！！！！

サイガがレーザーに向かって雷の斬撃を放つ。

放たれた斬撃は、レーザーをいとも容易く掻き消し、そのままガジェット本体を斬り裂いた。

サイガ

「その2人には話が必要だが、今は戦闘中だ。先にガジェットを片付けるぞ」

ヴィータ

「あ、ああ 悪い。後はアタシとサイガの2人でやるから、お前らはすっこんでろー!」

そう言ってヴェータはサイガと共に、残りのガジェットの破壊に向かった。

ルーテシア  
「うん ガリユー、ミッションクリア。いい子だよ」

森の中でルーテシアは、アスクレピオスを介して誰かに話しかけている。

言葉からして、スカリエツティが依頼した物を手に入れたのだろう。

ルーテシア

「じゃあ、そのままドクターに届けてあげて」

その指示を最後に、ルーテシアは通信を切る。

ゼスト

「品物は何だったんだ？」

ルーテシア

「わかんない。オークションの出品物じゃなくて、密輸品だったみたい」

ゼスト

「そうか」

ゼストはこんな質問をしたが、正直スカリエッティが何を欲しがったかなど興味が無い。

ゼスト

「戦いももう終わりだ。前線の騎士達が中々良い戦いをした。特に、途中から参戦した青髪の剣士はすごかったな。出来る事なら、アレとは直に刃を交えたいものだ」

ゼストが今回の戦いの感想を述べる。

その中で、最もゼストの興味を引いたのは、途中から参戦したサイガだった。

ゼスト

「まあ、それはさておき　お前の探し物に戻るとしよう」

ルーテシア

「うん」

その後、2人は森の奥へと消えていった。

T o B e C o n t i n u e d

第12話 〱 過失〱 少女の焦り（後書き）

感想・指摘・意見・質問等、お待ちしております。

ではまた

次回、 〱 亀裂〱 すれ違う思い

第13話 〈亀裂〉 すれ違う思い (前書き)

遅くなりました。

マジで。

なんと、2ヶ月ぶりです。

しかも、結構長めです。

では、どうぞ

第13話 く亀裂く すれ違ふ思い

【3人称side】

ホテル・アグスタでの広域防御戦からおよそ数時間後。

現場での事後処理を他の部隊に任せ、機動六課のメンバーは自分達の隊舎へと戻っていた。

帰還した者たち全員に一切の仕事が無いわけではなかったが、今回の戦いで疲労した体を癒すということはやっていた。

ただ1人を除いて。

六課 隊舎

ちょうど日が沈みきるかどうかといった頃の時刻。

六課の隊舎内の通路に足音が響く。

大勢の、ではなく、1人のそれだ。

サイガ

「どこにいるんだ　？」

足音の主は、六課に民間協力者として所属しているサイガだった。

隊舎の中、彼はとある人物を探していた。

冒頭で語った通り、ホテル・アグスタの警備に当たっていたメンバ―は全員休息を取っていたのだが、たった1人だけ、その中に姿が見当たらなかったのである。

サイガはその人物のことが少々気に掛かっていた。

それ故に、その人物を探すため、隊舎内を移動していた。

そして、

サイガ

「ん？」

ちょうど通り掛った場所にあった窓から、ふと隊舎の外を覗いた時、

サイガ

「！」

サイガの双眸が、その人物の姿を捉えた。

任務を終えてなお休息を取ること無く、ただ一人、黙々と自主訓練  
と思しき動作を、息を乱しながら行っている少女

ティアナ・ランスターの姿を

【ティアナ side】

ティアナ

「ハア、ハア、ハア

」

かれこれ3時間と少し。

私が自主訓練を行っている時間だ。

今私がやってる訓練は、普段のなのはさんの教導に比べればずっと短いし、ずっと簡単な訓練だ。

けど、任務から帰還して間もなく開始したためか、いつもより息が乱れているのが自分でもわかる。

俯いた顔からも大量の汗が地面へと落ちる。

どちらも自分の体にかなりの疲労が溜まっている証拠だ。

だけど、

ティアナ

「こんなんじゃ

ダメだ

」

そう、まだ足りない。

“凡人”たる私が“天才”たちの中にいるには、この程度の訓練じゃまだ足りない。

どれだけ疲労が溜まるうが、それをさらに跳ね除けるくらいの気合が無ければ、私はココにはいられない。

ティアナ

「もっと

もっと強く

！」

私はクロスミラージユを握り締め、俯いた顔を上げて前を見る。

訓練を続けるために、もっと強くなるために、さらに気合を入れる。

だけど、

????

「その辺にしておけよ」

ティアナ

「っ!!」

私の気合は、唐突に掛けられたそんな言葉によって削がれた。

私は驚いて声が出た方へ振り返る。

そこには、

ティアナ

「サイガさん」

サイガ

「探したぞ」

サイガさんが立っていて、少し険しい表情で私を見ていた。

言葉からして、どうやら任務後でみんなが休息している時間に、ただ一人姿が見えない私を探していたらしい。

そう考えた時、私の心が少し騒ついた。

ティアナ

「誰かに“探してくれ”って頼まれたんですか？」

騒ついた私の心に、真つ先に浮かんだ言葉だ。

もし、サイガさんが誰かに 隊長たちに頼まれて私を探していたんだとしたら。

そんな事を考えると、疲労の汗とは別に、少しの冷や汗が頬を伝って地面に落ちた。

しかし、

サイガ

「いや、俺自身が少し気になったので探していただけだ。別に誰かに頼まれたわけではない」

そうではないらしい。

ティアナ

「そうですか」

その言葉を聞いて、私は少しホツとした。

ホツとしたのも束の間、私はサイガさんから視線を外し、再び自主訓練に勤しむ。

その時、

サイガ

「その口振りからして、どうやらコレはお前の独断で行われている、文字通り“自主訓練”のようだな」

そんな質問がサイガさんから投げ掛けられた。

ティアナ

「」

私は答えなかった。

サイガ

「勤勉なのは精が出るが、今は仕事で疲労した体を休めた方が良い。訓練はそれからでもいいんじゃないか？」

ティアナ

「忠告は受け取っておきます。けど、この程度の訓練で音を上げるようじゃ、凡人の私はココではやっていけませんから」

サイガ

「凡人？ お前が、か？」

ティアナ

「ええ、そうです」

そう、私は“凡人”。

エリート揃いの機動六課の中で、ただ1人、私だけが。

ティアナ

「これくらいのこといいえ、これ以上の訓練をこなせるくらいじゃないと、凡人である私は強くなれないんです。だから」

だから私のことは放っておいてください。

そんな言葉を言おうとしたが、それよりも先に、サイガさんが口を開いた。

サイガ

「何を焦っているんだ？」

ティアナ

「っ！！」

その瞬間、私のすべての動きが止まった。

サイガ

「強くなりたい」という気持ちは大切だ。だが、今のお前からは“強くなりたい”という向上心よりも、むしろ“強くならなければならぬ”という焦燥感のようなものを感じる」

ティアナ

「っ！！」

サイガさんに心の中を見透かされたような気がして、不意にクロスミラージユを持つ手に力が入る。

サイガ

「そんな気持ちで、それも疲労が溜まった体でこんな訓練を続けたところで、能力が向上するとは到底思えん。体を壊すのがオチだ。そうなってしまえば元も子もないぞ」

ティアナ

「  
」

私は何も言わないけど、サイガさんの言うことはわかる。

今やってる自首訓練が、体に相当な負担を掛けてるってことも。

それでも、私は

サイガ

「自分を“凡人”だと卑下するのも、周囲の人間と自分を比例するのも感心はしない。そこに生じる“劣等感”は、自分を雁字搦めにする枷でしかない。そもそも俺が知る限り、才能が無い人間などココにはいない。皆各々が素晴らしい才能を持っている。勿論、お前もな」

ティアナ

「っ！ 無責任なこと言わないでください！！！」

黙り込んでいた私に掛けられたそんな言葉に、思わず声を荒げてしまった。

ティアナ

「もし仮に、私に才能があったとしても、強くなれなくちゃそんな才能、あっても意味無いじゃないですか！ 私は強くならなくちゃいけないんです！！ もっと、もっと強く ……！！！」

私の口は荒い言葉を連ね、私の心を表に出す。

サイガ

「ティアナ、俺は言った筈だ。“強さ”とは力や才能があることではなく、“誰かを思う心”を持つことだと。お前が何を望んで“強さ”に執着し、それを欲しているのかは知らんが、我武者羅に力や才能だけを求めた“強さ”は、いつか必ず自分が望んだ結末と食い違う ……それでも！！！」

ティアナ

「それでも！ 私は強くなりたいんです！！ 強くならなくちゃいけないんです！！！！！」

だから

ティアナ

「サイガさんは強いからそんなことが言えるんです！！ 強いから、私みたいな弱い人間の気持ちなんてわからないんです！！」

だから

ティアナ

「私がどんな“強さ”を求めようと、サイガさんには関係ありません！！ だから」

だから

ティアナ

「私のことは放っておいてください！！！！」

“だから私のことは放っておいてください”

ほんの少し前に心に浮かんだフレーズを、今度はハッキリと言葉に出した。

サイガ

「 わかった。 だったら俺はもう何も言わない」

サイガさんは私に背を向け、この場から去ろうとする。

サイガ

「 冷たいことを言うが、これだけは覚えておけ」

その去り際にサイガさんが私に言葉を掛ける。

サイガ

「 今のお前の遣り方では、絶対に後悔することになるぞ」

その言葉を最後に、サイガさんは私の前からいなくなった。

ティアナ

「 つー!!」

【3人称side】

サイガ

「ハア

」

ティアナとの一件から数時間後。

日付が変わるくらいの時刻。

サイガは自室で眠ろうとしていたが、中々寝付けず、少し隊舎内を散策していた。

“何も言わない”とはいっても、やはり気になってしまふ。

サイガが悶々としながら隊舎内を歩いていると、ある部屋から音が聞こえてきた。

その音は、ここ最近でかなり聞き慣れた、デスクワークをこなす音

だ。

サイガは音が聞こえる部屋のドアを開いた。

そこには、

サイガ

「なのは？」

なのは

「ん？ サイガさん？」

音のとおり、デスクワークをこなすなのはの姿があった。

なのは

「どうしたの？ こんな時間に」

サイガ

「それはコッチのセリフだ。お前こそこんな遅くまで仕事か？」

なのは

「うん。後は、これからのフォワードたちの教導内容の思案とか」

なのはは笑顔で言っているが、その表情には微かな疲労が見える。

サイガ

「まったく、ココの人間はどうしてこう無理が好きなんだ？」

先刻のティアナといい、目の前のなのはといい。

そう思って、サイガは呆れ口調で呟く。

なのは

「？ 何かあったの？」

サイガ

「ああ、実は」

サイガはなのはにティアナとの一件を話した。

なのは

「そうなんだ」

サイガの話聞いたなのは表情が少し曇る。

そんなのはを見て、サイガは思い切って口を開く。

サイガ

「なのは」

なのは

「ん？」

サイガ

「不躰極まりないことなのだが、ティアナに何があったのか  
えてもらえないか？」

教

なのは

「うん」

なのははサイガに応え、その口でティアナの過去を語り始めた。

なのは

「ティアナには、歳の離れたお兄さんがいたの。名前はティータ・  
ランスターさん。すごく優秀な魔導師で、執務官を目指してたの」

サイガ

「兄がいた、ということは、今は」

なのは

「うん。6年前、任務中の事故で」

サイガ

「そうか。それがティアナが“強さ”に執着する原因なのか？」

なのは

「それもあると思うけど。一番は多分、お兄さんの葬儀の日に上司が言った言葉だと思う」

サイガ

「聞かせてくれるか？」

なのは

「『犯人を追い詰めながらも取り逃がすなんて首都航空隊の魔導師としてあるまじき失態だ。たとえ死んでも取り押さえるべきだった』って。もっと直球に、『役立たず』とか」

サイガ

「っ!!」

「そうか」

サイガは表情にこそ出さなかったが、内心驚愕し、そして同時に途方もない憤りを感じた。

上司が部下に掛ける言葉ではない。

いや、真つ当な人間が言う言葉ではない。

況してそれを葬儀の日に、遺族の前でなど。

サイガ

「悪かったな、わざわざ話してくれて。あまり無理するなよ」

なのは

「うん」

最後になのはにそんな言葉を掛け、サイガはその場を去った。

1週間後、サイガは訓練場を目指して歩いていた。

この日、なのはとフォワードたちによる実戦訓練が行われることになっている。

サイガはそれを見学するつもりなのだ。

しかし、

サイガ

「（もう始まっている時刻だな）」

サイガはその訓練の開始時刻に訓練場へと向かえていなかった。

というのも、ここところサイガは少々睡眠不足に陥っていた。

切っ掛けは1週間前になのはから聞いたティアナの過去。

あれからというものの、サイガの心中に言いよつた無きモヤモヤが渦巻き、連日中々寝付けないでいた。

その結果、この日に行われる実戦訓練の開始時間に遅れてしまったというわけだ。

そして、少し早足で歩くこと数分。

サイガは訓練場へと辿り着き、中へと入る。

ヴィータ

「ん？　なんだサイガ、遅かったじゃねーか。もう始まってんぞ」

最初にサイガに気づき、声を掛けたのはヴィータだった。

訓練場の擬似フィールドの『廃墟街』では、ヴィータの言ったとおり、最初のスターズの実戦訓練が行われていた。

そして廃墟街の中のビルの一つの屋上で、ヴィータとフェイト、エリオ、キャロの計4人がそれを観戦している。

サイガ

「すまない。最近、少々寝不足気味でな。今日も寝過ぐしてしまっ  
た」

サイガは別に言い訳をせず、率直に遅れた理由を述べた。

フェイト

「サイガが寝不足って珍しいね。何かあったの？」

その理由を聞いて、今度はフェイトがサイガに声を掛けた。

サイガ

「ちよつと　な　」

フェイトの問いに、サイガは言葉を濁した。

寝不足の原因は言うまでもなくティアナの件だ。

しかし、なのはには無理言って教えてもらったが、やはり他者のこ  
とをベラベラと吹聴するのは気が引けたのである。

サイガ

「それよりも、そっちこそ何かあったのか？ 妙に騒ついていたよ  
うだが」

サイガは話題を変更した。

実はサイガが訓練場へと足を踏み入れた時、見学スペースが少しザ  
ワザワしていたのである。

ヴェータ

「ああ、実は     なんかティアナの調子がおかしいんだ」

サイガ

「ティアナの？」

それを聞いた瞬間から、サイガの中に妙な危機感のようなモノが芽  
生えた。

フェイト

「うん。ティアナの魔力弾にいつものキレが無いの。コントロール  
は良いみたいなんだけど」

サイガ

「」

サイガは怪訝な表情で、無言のままティアナの姿をその眼に捉えていた。

スバル、ティアナの2人と戦っているのはも何か気に掛かったのか、サイガ同様怪訝な表情を浮かべている。

そんなのはに、スバルが真正面から攻め入る。

いつもの2人の戦法なら、ここでフェイクを使うのが常だ。

そう考えたのはそれを打ち消す為に魔法球を4つ生成し、フェイクであろうスバルに対して放った。

しかし、それは“いつもの戦法”の場合であって、今回は違った。

なのは

「っ！？ フェイクじゃない！？ 本物！？」

なのはは少し驚いたが、構わずに生成した4つの魔法球をスバルに放つ。

スバル

「ぐっ  
」

スバルは歯を食い縛りながら魔法球の全てをバリアで防ぐ。

そして、そのままなのはに向かって拳打を放つ。

スバル

「うおりゃあああああ！！！」

なのは

「くっ！！」

ガキイイイイン！！！！

なのははスバルの拳打を、間一髪、瞬時に展開したシールドで防いだ。

スバル

「うわっ！？ ああああああ！！！」

スバルはシールドに防がれた反動で吹き飛ばされ、

スバル

「うわっ、とお！」

自身が発動していたウインググロードの上に着地した。

なのは

「こら、スバル！ ダメだよ、そんな危ない軌道！」

スバル

「すみません！ でもちゃんと防ぎますから！」

なのは

「？ ティアナは？」

なのははスバルに注意しながら、いつの間にか姿を消していたもう1人の相手を探した。

そして、あるビルの屋上に、砲撃の構えを取るもう1人　ティアナの姿を捉えた。

エリオ

「！ あそこですー！」

時を同じくして、エリオも2、300メートル離れたビルの屋上に、ティアナの姿を見つけた。

キャロ

「あんな所に!？」

フェイト

「砲撃！？ ティアナが！？」

ティアナが砲撃を放とうとしている。

一同にとって予想外の光景だった。

しかし、砲撃が放たれることは無く、そのティアナの姿が消えた。

エリオ

「あつちのティアさんは幻影！？」

フェイト

「本物は！？」

サイガ

「上だ！！」

サイガが本物のティアナの姿を見つけた。

その場所とは、なのはたちの頭上。

ウイングロードを利用してなのはの上まで移動し、銃身から生えた魔力の刃をなのに向けながら落下して行く。

その奇襲と同時に、スバルもなのはに攻撃を仕掛ける光景が眼に映った。

その瞬間、

サイガ

「っ！！」

サイガは感じ取った。

なのはが発する、異様な雰囲気。。

そして、他の誰にも気づかれないように、そっと戦闘装束へと服を変えた。

ティアナ

「一撃必殺！！ でええええええい！！！」

ティアナは叫んびながらなのはに向かって行く。

その叫びどおり、一撃必殺を狙って。

スバルも同じく。

しかし、

なのは

「レイジングハート、モードリリース」

ダアアアアアーン！！！！

なのはとティアナ、スバルが一斉に激突すると同時に、衝撃と煙が起こった。

そして煙が晴れると、そこには驚愕の光景があった。

なのは

「おかしいな。2人共 どうしちゃったのかな？」

なのはは左手でスバルの拳を受け止め、右手でティアナの魔力刃を掴んでいた。

両手共素手で。

ティアナの魔力刃を掴むその手からは鮮血が流れている。

しかし、驚愕すべきなのはその光景ではない。

なのはの纏う雰囲気だ。

何も感じられない。

ありとあらゆる感情が、一切。

なのは

「頑張ってるのはわかるけど、模擬戦はケンカじゃないんだよ？

練習の時だけ言う事聞くフリして、本番でこんな危険な無茶するんなら 練習の意味、無いじゃない」

自分が放つ異様な雰囲気周囲に不安を与えているとも知らず、なのはは淡々と言葉を連ねる。

なのは

「ちゃんとさ、練習通りにやろうよ。ねえ」

スバル

「あ、あの」

なのはの言葉はとても無機質で、言葉と言つよりも何かの信号のようだ。

感情と言つものが宿っていない。

なのは

「私の言ってる事、私の訓練 そんなに間違ってる？」

ティアナ  
「っ！！」

ティアナは魔力刃を掴むなのは手を振り払い、後方へ下がって再度攻撃を仕掛けようする。

ティアナ

「私はもう！ 誰も傷つけないから！！ 誰も失いたくないから！！！！」

ティアナは思いの丈をなのはにぶつける。

心の中のすべてを。

ティアナ

「強く なりたいんです ！！」

ティアナの双眸からは大量の涙が溢れている。

なのは

「 少し、頭冷やそうか 」

なのはは右手の人差し指をティアナに向け、魔法陣を展開する。

なのは

「クロスファイヤー」

ティアナ

「うわああああああ！！！ ファントムブレイ」

なのは

「シユート」

ダアアアアアン！！！

ティアナ

「かはつ　　！！」

なのはが放った6つの魔法球は、惨くも全弾ティアナに命中した。

スバル

「ティアア！！」

スバルはティアナの許へと駆けようとするが、

ガッ！！！

スバル

「っ！？ バインド！？」

そのスバルの体にはバインドが掛けられていた。

なのはが仕掛けたモノだ。

なのは

「じつとして 。よく見てなさい」

なのはは再びティアナに視線を移す。

ティアナはもはや立っているのも限界のようで、その顔にも生気が感じられない。

とても危険な状態なのが一目でわかる。

しかし、そんなティアナに対し、なのはは非情にもさらに魔法球を

放とうとする。

なのは

「クロスファイヤー」

指先に展開された魔法陣から、数個の魔法球が生成される。

そして、

なのは

「シユート」

なのは再び、魔法球を放った。

スバル

「ティアアアアアア!!!」

スバルが悲痛な叫びを上げる。

相棒の、親友の、命の危険を感じて　。

そして、

ダアアアアアアン！！！！！！

魔法球が、命中した。

ティアナではなく、誰かが展開した雷の障壁に。

なのは

「 どういうことかな？ 」

なのははその障壁を展開した人物が誰なのかわかり、その人物の名を呼ぶ。

なのは

「 サイガさん？ 」

サイガ

「 」

なのはとティアナの間にサイガが無言のまま立っていた。

スバル

「あ ああ」

ティアナの命の危機が去ったことと、目の前に突然サイガが現れたことに、スバルは混乱し、上手く言葉を発せなかった。

そんなスバルに構うことなく、

なのは

「っ!!」

サイガはなのはを睨みつけた。

そして、

サイガ

「なのは」

そう、呟いた。

静かながらも明らかな怒気を纏いながら。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

第13話 〽亀裂〽 すれ違う思い（後書き）

ティアナの心情が上手く書けてるかが不安です。

感想・指摘・意見・質問等、お待ちしてます。

ではまた

次回、 〽激突〽 サイガ vs なのは

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7665v/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS～神となりし光龍～

2011年11月24日00時45分発行